

門 天118
編 1215
卷



序

郭々々は又々々々々之度々

民所度居也々々々々々之

やう又々々々々之溝釋あはれど

其巨健々々々々々之懸掛々々々々

あてやた々々々々々之思々々々

あさく々々々々々之寄々々々々

なほ々々々々々之大中臣能宣新良

うう々々々々々之意々々々々

し々々々々々々之何々々々々

井ノ口ハ君ぞ種々まじりたること
 藤原の隆房のつづぶや
 残る宣哉と書の中を記す
 感多き古の人ありて
 思ぬし行なはるる
 何の國ありて

珍古市人蔵

寛政二のつじき

重正月

凡例

一 大坂新町熱名等の事
 小色之味録
 其後
 又年類
 撰今新町
 考出
 名所古
 古例
 和漢
 記
 引用
 の連

一 流石小石押多しと云ふも南津
 の揚屋小膳りりいぢし法持後
 中々筆も出はくしがさかぬも
 ちと國の徳字ありけんかあこの
 奥小百台一の強帯と云ふ俗々
 一 背ろう面所なるるにたまふ
 とりどもるんげく法玉へ名を
 たりりたる品の品とりる奥へ
 名紙さきの世其因縁をくりと
 たりんばくありあはまのあぐひ
 る河ぬま古創其介けさ小ま
 たる事い遠く考出し増補を
 くらぬ所との也

大阪新町
 細見之圖
 零標

品目

- 一 廓紀原
- 一 新町開基 并 町小名因縁
- 一 柝陌格式
- 一 新町橋年曆
- 一 東西大門盪觴
- 一 土地方角考 并 門々開発
- 一 花街名所古跡

元 無 嘆 吉 例

越 中 橋 最 初

櫻 屋 敷 春 興

附 櫻 井 清 冷

松 屋 敷 枝 折

觀 音 裏 隨 緣

道 者 橫 町 杉 子 掛 由 來

高 瀨 度 佳 境

山 家 敷 勝 景

螢 澤 水 嬉

一 花 柳 年 中 行 夏

一 揚 屋 無 雙

一 同 座 敷 画 圖

一 茶 屋 負 數

一 里 詞 篇

一 太 夫 品 附 一 夜 妻 辨

附 越 中 總 用

夕 霧 元 引 舟 初 發

吾 妻 松 山

一 傘 印

一長持運送元調度通用

一仕着行粧元二日着
三日着

一身請門出

一天神位階元小天神

一鹿子位部類

附 月影汐相當

一牽頭女郎情元藝子風俗

一籬節一曲

一局暖簾差別

一和氣称号

一禿由緒

一呼迎女古實

一勸進芝居太鼓不打由縁

一夜見世繁花

一限太鼓作法

増補之

一君粧俚評

一途中之式

一座敷之客儀

一呼立之大法

一 禿之利發

一 引舟之掛引

一 藝子牽頭之客儀

一 仲居取持

一 遊客之幽趣

一 粹之辨

一 中古好衣裳

一 夕霧の文

一 家々珍雅名物

一 里詞篇

一 價諸分

一 遊女門出之故實

一 紋日定目

一 方角大畧圖

一 揚屋茶屋名寄

一 商人名物名寄

己上

とてしるべし

大坂新町 細見之圖 湊標

○ 廓紀原

為津の柙泊へ往昔天正慶長の比
より諸所は格女を抱渡世のもの
しを寛永年中今村去地を
おくれ諸所の格女を一所に
一廓の小軒を設け其
亦次良といは浪人老小石廓の
庄屋年易と被お作付水くけい
せし町と今寛政十年
百七十年余少也

○ 新町同基 町小石廓

新小町より

新町とよお名あり又その地をい
中とよ

新町のありの

香稻庵
竿秋

うきう 汗干海

▲瓢箪町

但南組

通る雨あり其の道頓がり小
即ちとん町とて其所の一町元和
の比は三つらへ移り又古老の曰
元末伏見浪人よ本村又次郎と
いつる浪人ありし由け人元本村氏
の乳の人の子あり故ありと豊
住家市馬平の瓢箪と傳ふ也
亦指と故小瓢箪と傳ふは元和

寛永の比本村をかごり本村屋又
次郎と名乗廓七町の惣支死して
其國よハ武具をく務りおき一小二
代目又次郎あおぬ里天和年中小
後義小侍ありて元禄年中の役
断絶をすしまぐい新町通とて
又次郎町とていふれも其後より政
瓢箪町といひありしをこそ新町
橋を越え通るとも也

▲佐渡湯町

但白組

元正長長の比より上將ありしこ
佐渡湯子とて湯とよまぬお隣の池
ありし小寛永の比今の比中移り一廓
の内小寺とて湯屋祭の縁ありり
佐渡湯町とよけ西の一町を依りて

紙後町といふ事は、紙後紙後と並の
土の脈とて、紙後町の脈を紙後
町といふ也

▲古原町 但北紐 行東町迄

北天は、つ小吉原といふ所とあり
そは、つ小吉原を故名にといふ
中、小人のあまは、又通紅
の北を、つ小吉原といふ

▲新橋町 但北紐

▲新酒町 日新

これ、つ小吉原といふ所とあり、
又長年、つ小吉原といふ所とあり

▲九軒町 但南紐

け、つ小吉原といふ所とあり、
三に、揚屋九軒を、取立、つ小吉原
かく、これ、つ小吉原といふ所とあり、
根生、の揚屋九軒、つ小吉原といふ所とあり、
又、新酒町、つ小吉原といふ所とあり、
新合、十二軒、つ小吉原といふ所とあり、
揚屋、つ小吉原といふ所とあり、
お、け、つ小吉原といふ所とあり、
あ、つ小吉原といふ所とあり、
死、つ小吉原といふ所とあり

▲作原町 但南紐

往、つ小吉原といふ所とあり、
つ小吉原といふ所とあり、
つ小吉原といふ所とあり

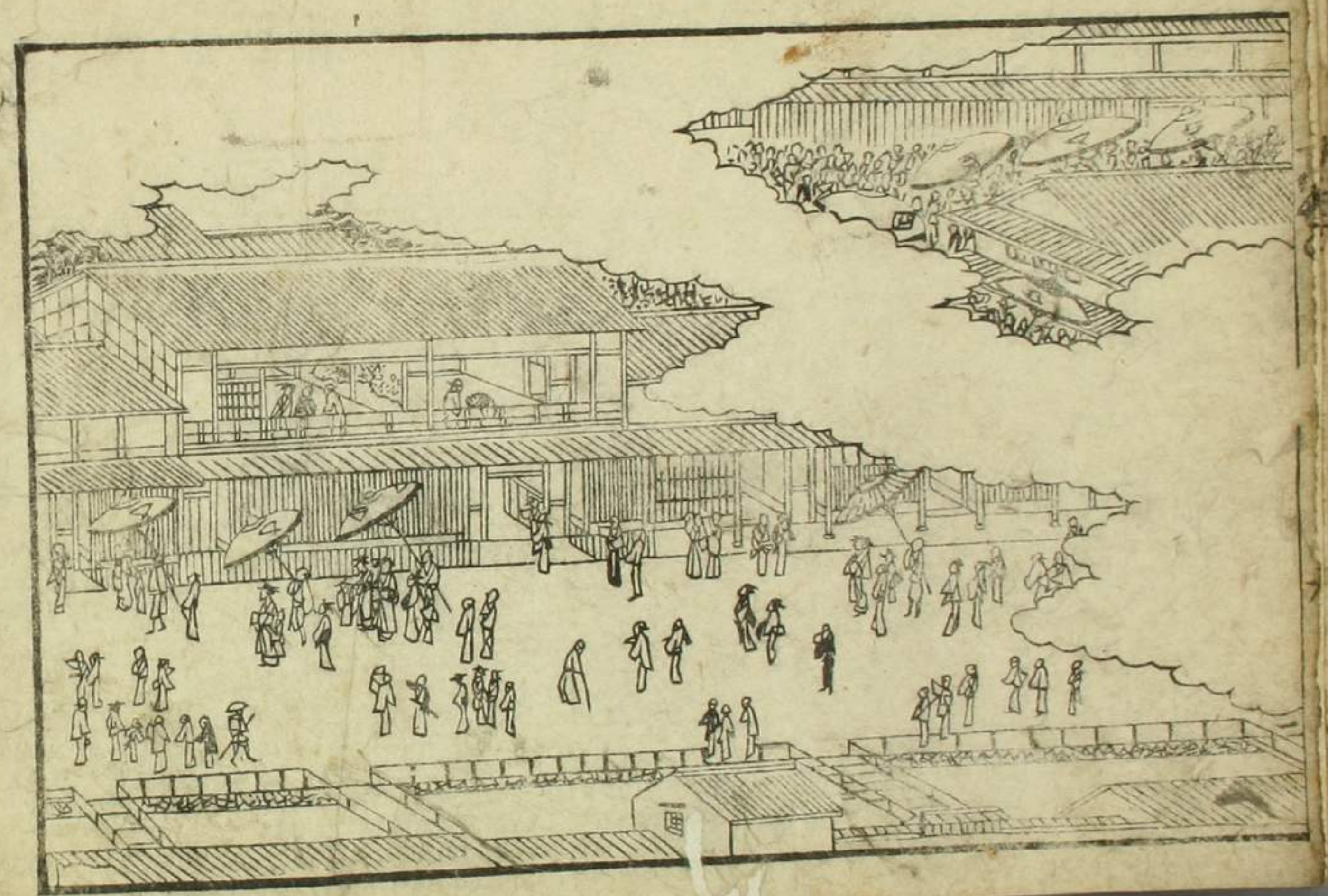
三紀打のりの地と改めりて
領一町一戸を改めりて
佐後屋町と云其後たき浦より入
小賣屋一漸佐後屋といふ名目
小名而し小賣より佐後屋といふ名目
こまに代り甄子所年易屋
支取を佐後屋建屋といふ人
之後完全冷屋津浦松屋に
いふ二人に二子割ゆぐさ又松屋
より完全冷屋へ一所ゆぐさ今い又
一町一屋を改めりて二増二ツ小
よりれ一故今二形後完全冷屋い
四代にきまより平野屋世即き湯
といつ商人賞清といふ二代にき
之後おまにけりけりしき世四
年におま保九辰年大坂大火あり

新焼く字又新の内系屋高貴
のとの信宅といふ者より新焼後
ハ樞屋を改めり大産屋あり姓
郭にありて無此お七町さうり
○ 柵印格式

惣辨廓の内何れなるは佐後
本村屋又冷屋庄屋お七町の格を以
今小又町の年易下お七

○ 新町橋年曆

西橋堰順天町を知らぬ橋あり
往右の廓一方口ゆくまゝ其時
分よけ橋あり東西の内岸敷免
の後寛文二十二年小くめり
此廓御書目のはる橋あり



廓中やうなる御座れば新町なりと
不則後ふわわも今寛政十年と
百廿八年あり

○東西大門遺跡

東の大門は少むく一歩あると
西の大門は少むく一歩あると
入申す所のをさあゆふさる事
り又堅牢は倫ありし狼藉もの
かど城を捕る所の番所なり
帝亮出入の改所なり
付番所へはく様さすまごつてい
等の用公及具少敷ありし
享保九辰年出火を焚焼し
その後いんごあり

○去地方角考

東の西横堀御を坊の町跡はつ町
後をつ町を限り西に立寄堀を裏
町南に長堀を側をちつ町と和名
町留田屋町かぎり北に立寄堀を
側をちつ町中之町を限り東西
の大門は小各並所をわく西に
一方は少くありし明暦二酉年小
東の大門は少敷ありし
の大門は少敷ありし
用公門は少敷ありし
あけどありし小享保九辰年小
大坂新焼後古原町の門を少敷
又宝曆四辰年新に寄附町門を
しきり年信後号町東の門を

初き、いせこれわらう今へ門ふけ
あり各苗取

○花街名所古跡

▲芝罘之吉例

此新町風俗の以て通と小
新屋といふ女房屋ありけりや
の末は清妻尼といふ人世渡り
一と武年の新小雑賣の餅と
潤く子と芝罘餅のそと小舟
元朝の祝儀おさへり其
次第小雑賣といふ後小大分限
なり其例小まも毎年雑賣小
かぶりを入連祝儀一とあり世人
芝罘といふ名をとり今には家
とあり

▲城中橋取初

寛文年中新町に屋敷を居あ
たりり木村屋又此節抱少城中といふ
全盛の女郎毎に揚屋入居中の刻
限よ見おのた若男若女並に
志も大なる元は一性来志も
さく則又此節屋敷の表より九軒
町へありありとをさきまは
橋より揚屋入居と一故にを引
く世人城中橋といふ名は

玉法古着

為徳如花

あまれ我恋よん

ひたの

まのこけん

▲櫻家あまま玄真

并 櫻井法全

元禄年中きと通り筋小橋を
松屋とくくを橋をききし
甚鼻と云名しるあるは松屋
家あま小大木の橋あま
九形町あげ松井竹屋大
是と雲海し持信へり毎年
小橋は松井竹屋の橋や
大長くんちをして
卯子四月八日お焼して
は松屋橋井戸して
こゝ松屋あまの通り

家集

源三位朝政

は子うも花の本と人の
くくくくくくくくくく

▲松屋あま枝折

又松屋あまといなり
橋やききのむい
いふ女長松を其裏
これも見付小成
高尾の石おち
の虫火ま

五世集

佐藤お長

松屋のうま

あのみくも子代

▲観音寺裏隨縁

石山

門前の庭に小茶師堂大空といつて
之を流流の山伏あり二層四面の堂と
建守りまはり延玉の比被茶師堂
を白髪町くろんぐんの地へ移し被
くろんぐんも又室利持の所へ移し
右門口南側の長友を今石の人
と呼んぐくろんぐん東家と云

▲道者換町扱子掛来由

石巻換町といふ流子町東の岡より
一丁目の南へ入換町へ去るに多
くは換町初氣丸の見せ付く
をきりぬ故に名を又扱子掛と
りて東の門へ入出北へゆき新
京橋町の比へ換町を云子掛の
和氣女師の見せ付のむらひあり

のあふ今小玉つとも板の端を
くしり置きたのあふき板小似
俗に扱子掛と名をとり

▲高瀬庭佳境

高瀬町の東小高瀬中より高瀬
の庭に水あふれ山とつらと
あふりつらと流るは所より
くしり置きたのあふき板小似
俗に扱子掛と名をとり

▲山家友勝景

高瀬町の西の堀に水木屋を
といつて女師屋の長あり其
くろんぐん水木屋の樹木花
敷ありかしはあし申小おと

二月 初年二年廿二日彼中

け里のぬ月あく賑りきる也

三月 毎年去る三月梅さうの比

より賑ふより和振さうと通ふ也

あくさるを賣るを梅をさうと先

山吹或は牡丹若菜百合は湯州

及萩の町はまぐさ葉はさうと賑

うく一具也

十万堂 來山

花さくく死むむはり

病の那

四月 八日花梅あきりき也

又月 門松あきりき通ふぬのぢり

をさくも男子も家へは居るのうら

まらぬれも町幅せぬ水用地乃

さほけのあきりきもあきりき

と免儀町へうゆもあきりき

ぬ月もあきりき入はるる賑り

六月 南月中は流るの雨振あき

りさけ里の群集の中もあきりき

あきりき法天のあきりき廿一日あきり

てくら町あきりき外の賑りき清

人從接るあきりき一敷中はあきり

あり年小うう福あきりきあきり

おひき

七月 七夕あきりきあきりき

けいせいの文書はまきや

あまの川

俗年十月廿七日あきりきあきり

聖堂のまわりに市を東の門内
通の道のまわりに小店をこぎ
出所のまわりに他ありも買人
あり難きをたてしとほす
より悔りまぐ大改日ありは月をま
確としるあり新町去ま確を
ひくはあり確のふりも他あり
ひりふりふり風派ありまぐこれ
例年より不定りたることあり
ふりあり賃をまぐ或は町へ大及
あり町確の幸もあり又先年
佐後町の町あり確場をかま本戸
を張り客一人は確子一人に揚を
ま料まぐ確入用をまぐし
幸もまけとねい字にこれ取沙は
うりかまは中人中終りそのち

下丁

大改日は六月の丙辰と同日のふりて
くりくい奥の改日定まはまひりて

秋の暮る男はあうぬ
そのちりい

推が
方磨

十月 亥の子の夜は揚をい
後ふふきりきまぐ四紙講十夜
これ勿論

十一月 巳月改日まぐしとまぐも改日
家々の煉掃これ改日

煉掃まぐし掃まぐし

宝昔齋
其の田
廿二房のほりや

十二月 辛くまぐ家々の餅はまぐ

その中からこれに別とて又改日ゆく寺
甲の大祝中へ移ししに三ヶ年
本より一其の後の日へ奥山百銀
俵に

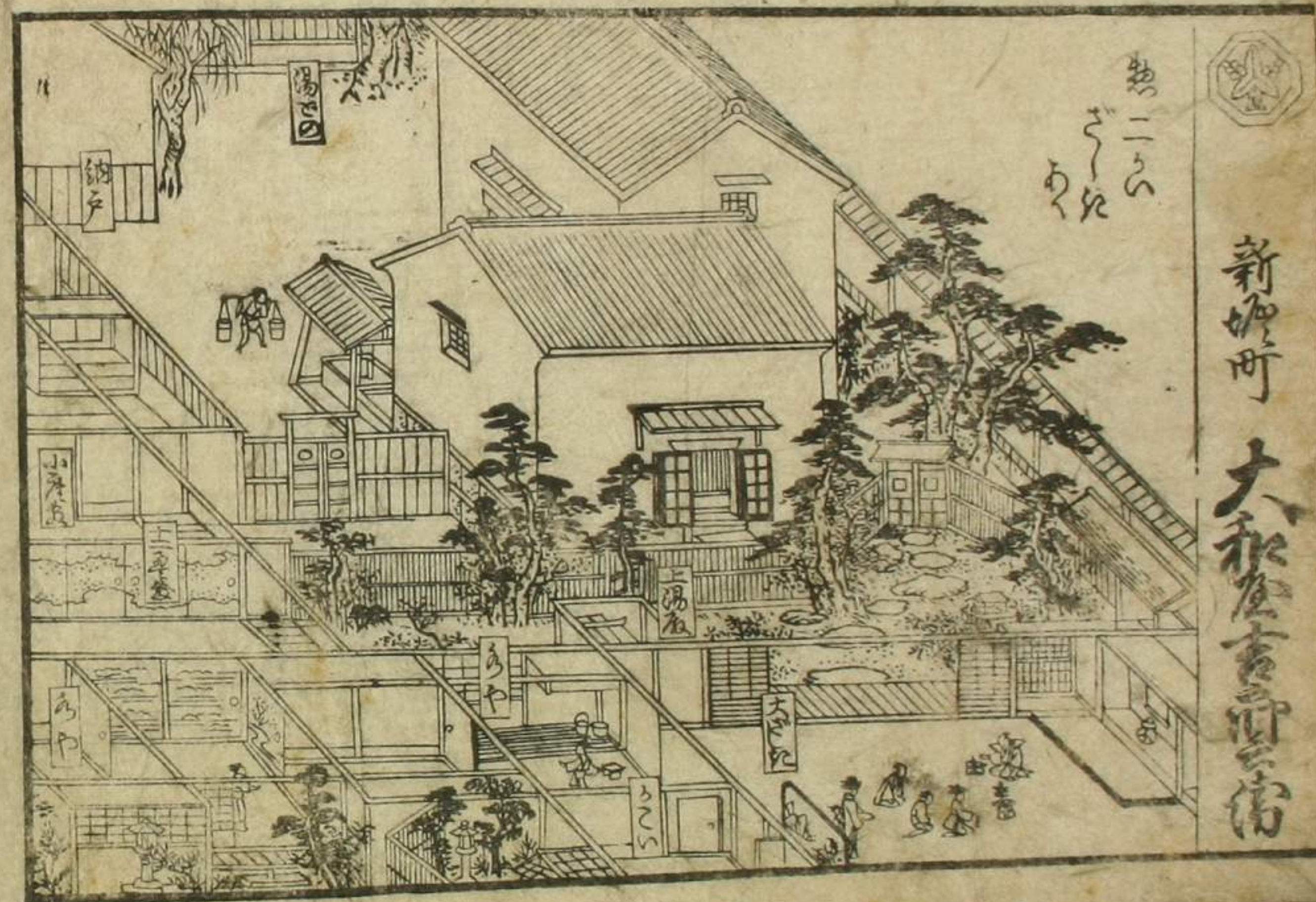
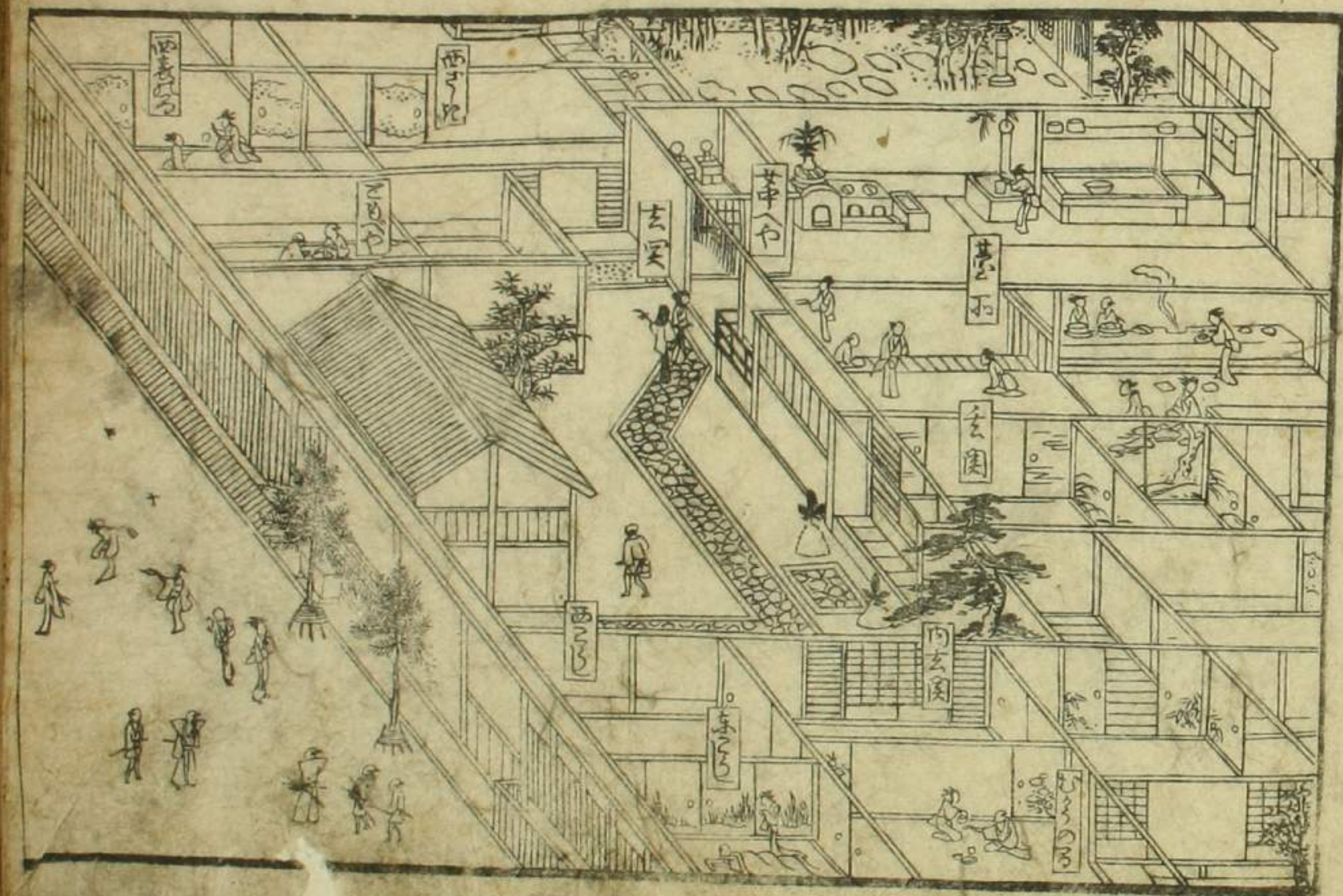
○揚屋無雙

諸玉小くりとつるものなみ
とつるも高津の廓より寛治
あり金子け地乃揚屋小膳
ありされいおりの入良運の合
小系徳宗の女郎小江戸吉原の
張をよとせ長湯丸山の夜衣を
よとせ大坂新町の揚屋
よとせとつひに
よとせとつひに
よとせとつひに
よとせとつひに

かくいある師どとおもる水樓と
つもい所よひひら西海を揚屋
東小門をたみびき
そびく山ありの夜衣と
の画のよきは
揚屋を及ぶ
揚屋を及ぶ
揚屋を及ぶ
揚屋を及ぶ
揚屋を及ぶ
揚屋を及ぶ
揚屋を及ぶ
揚屋を及ぶ
揚屋を及ぶ
揚屋を及ぶ

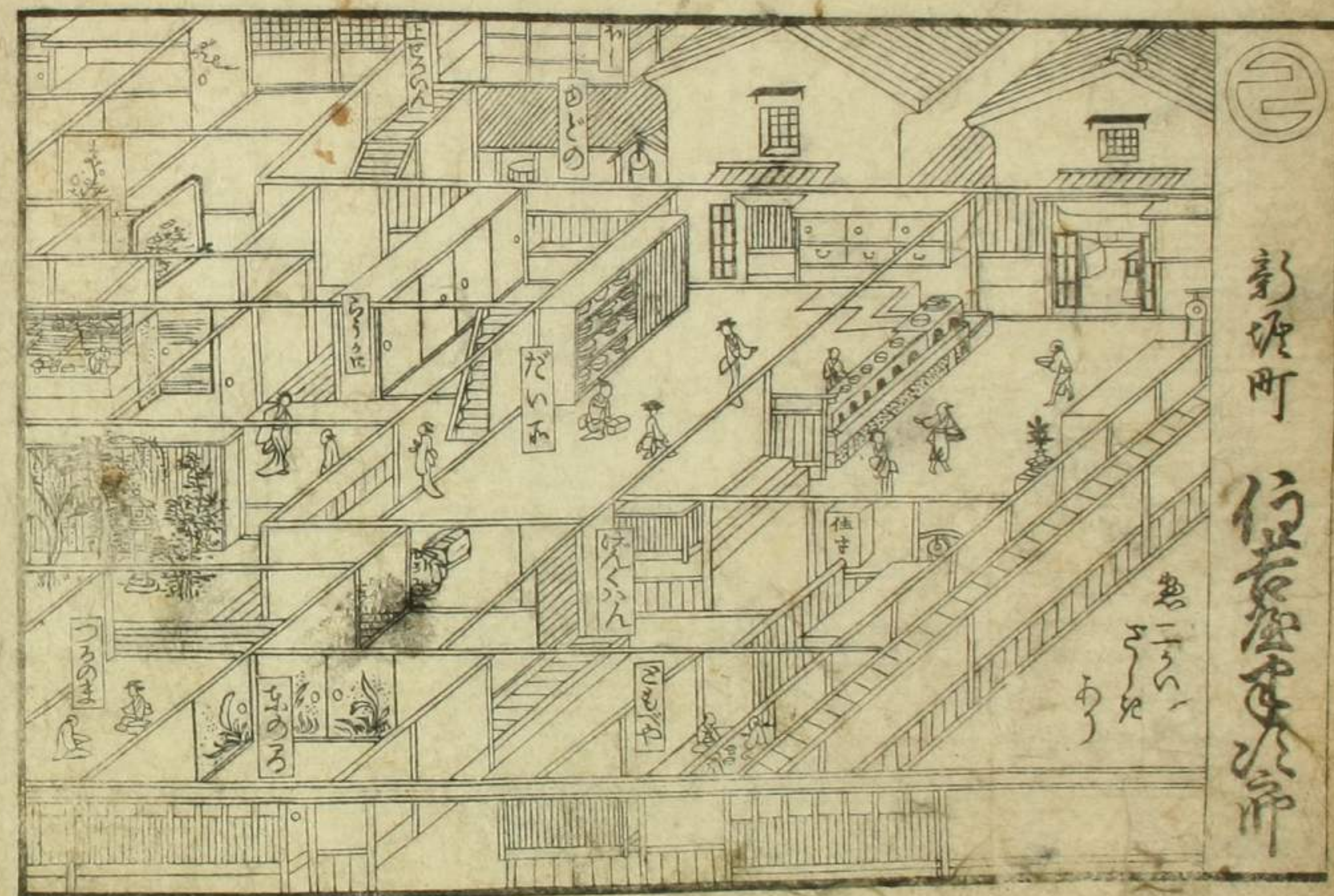
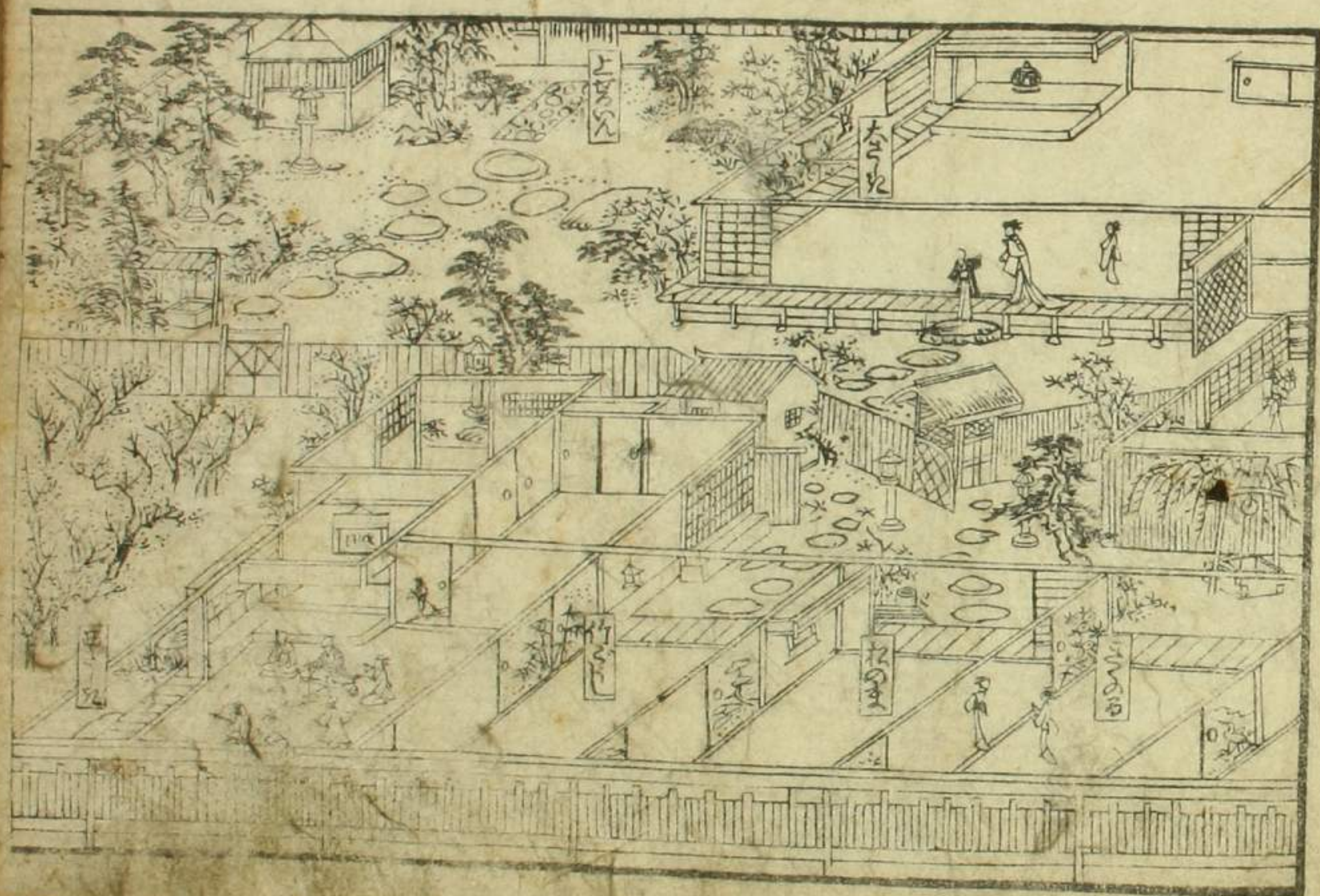
九郎町井筒屋

おちやうも情のあはれなり
あしをあらさの色の極と



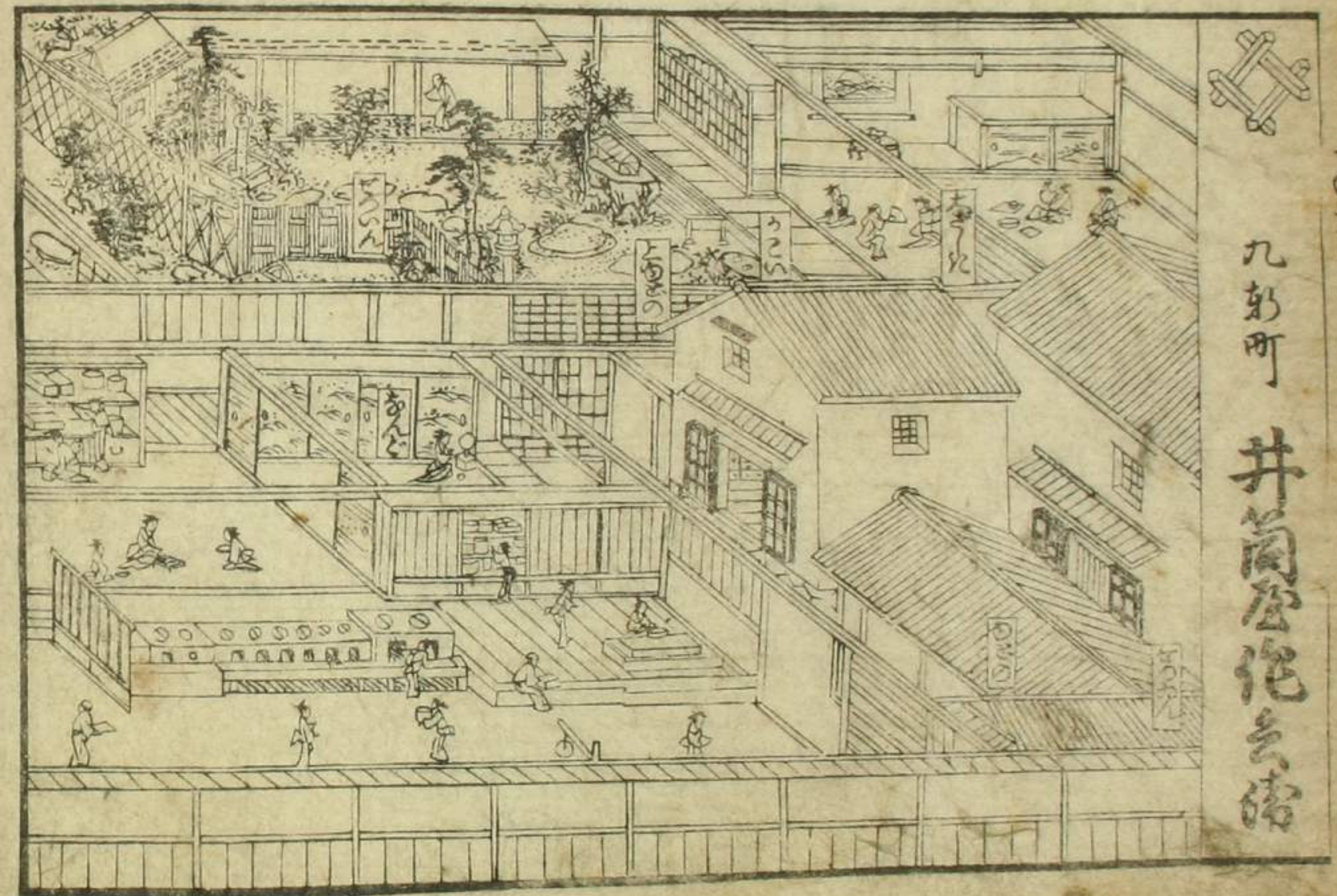
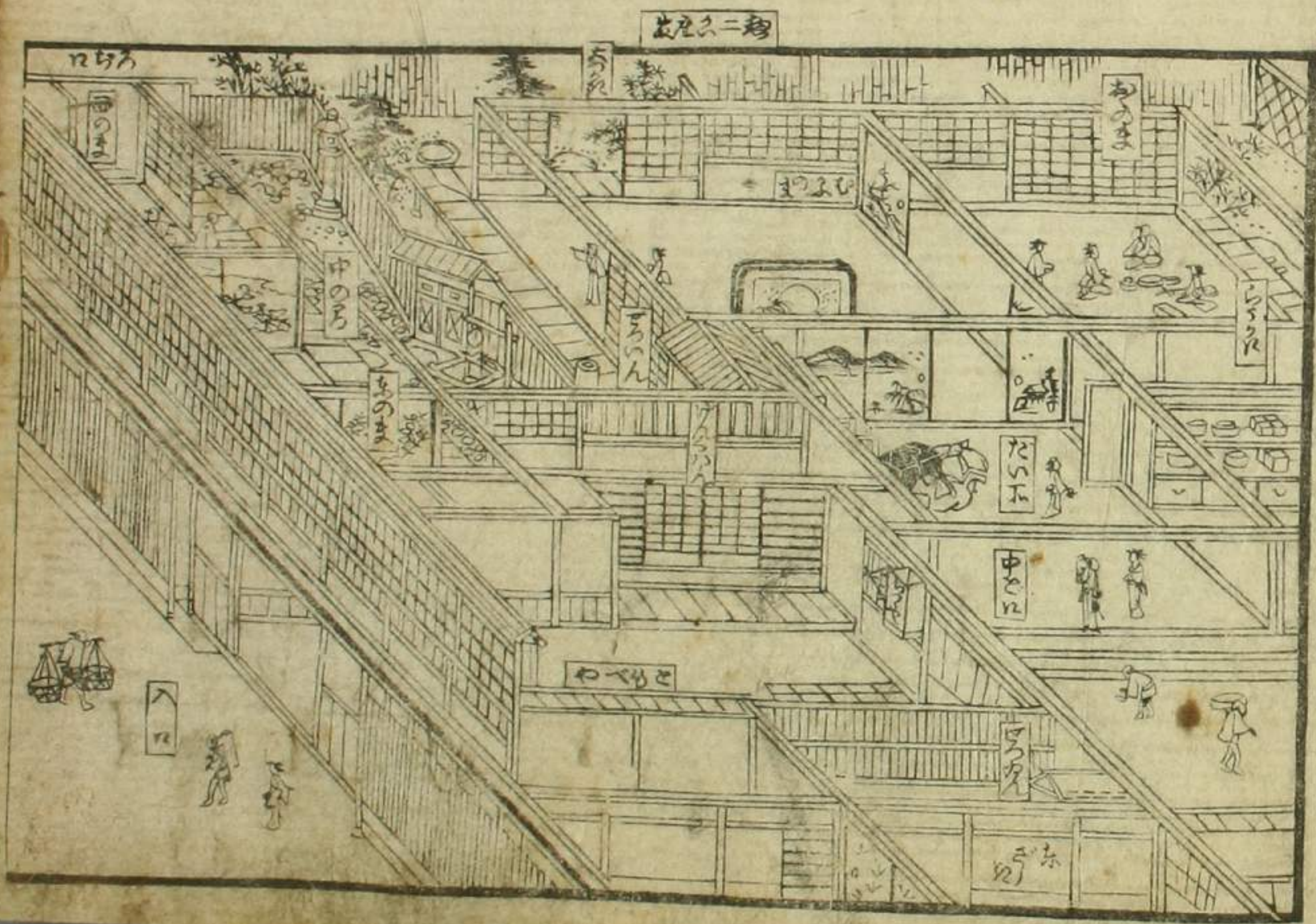
二二
二二
二二

新所 大和書院



新町 仁徳堂

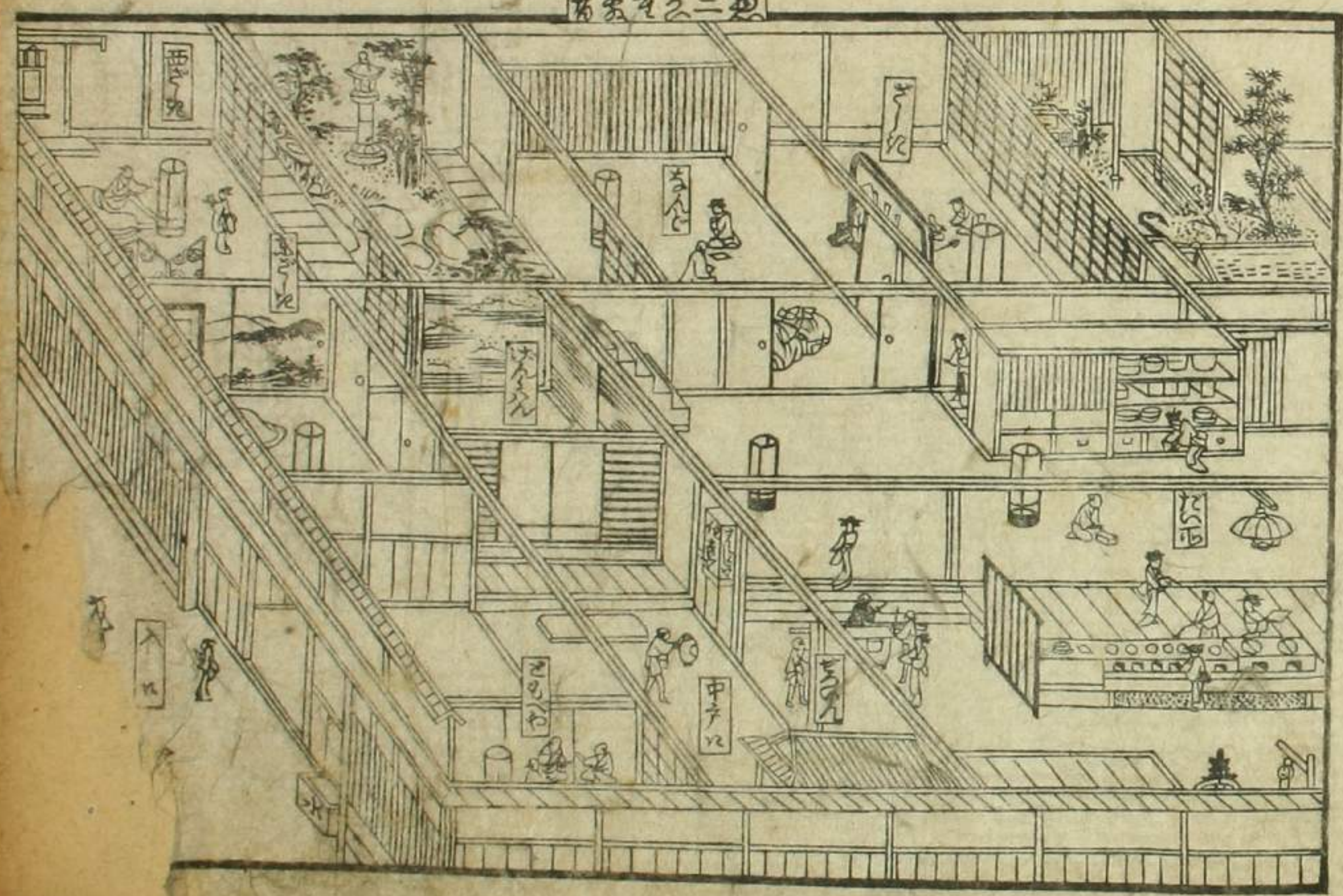
無二の
三ノ
町



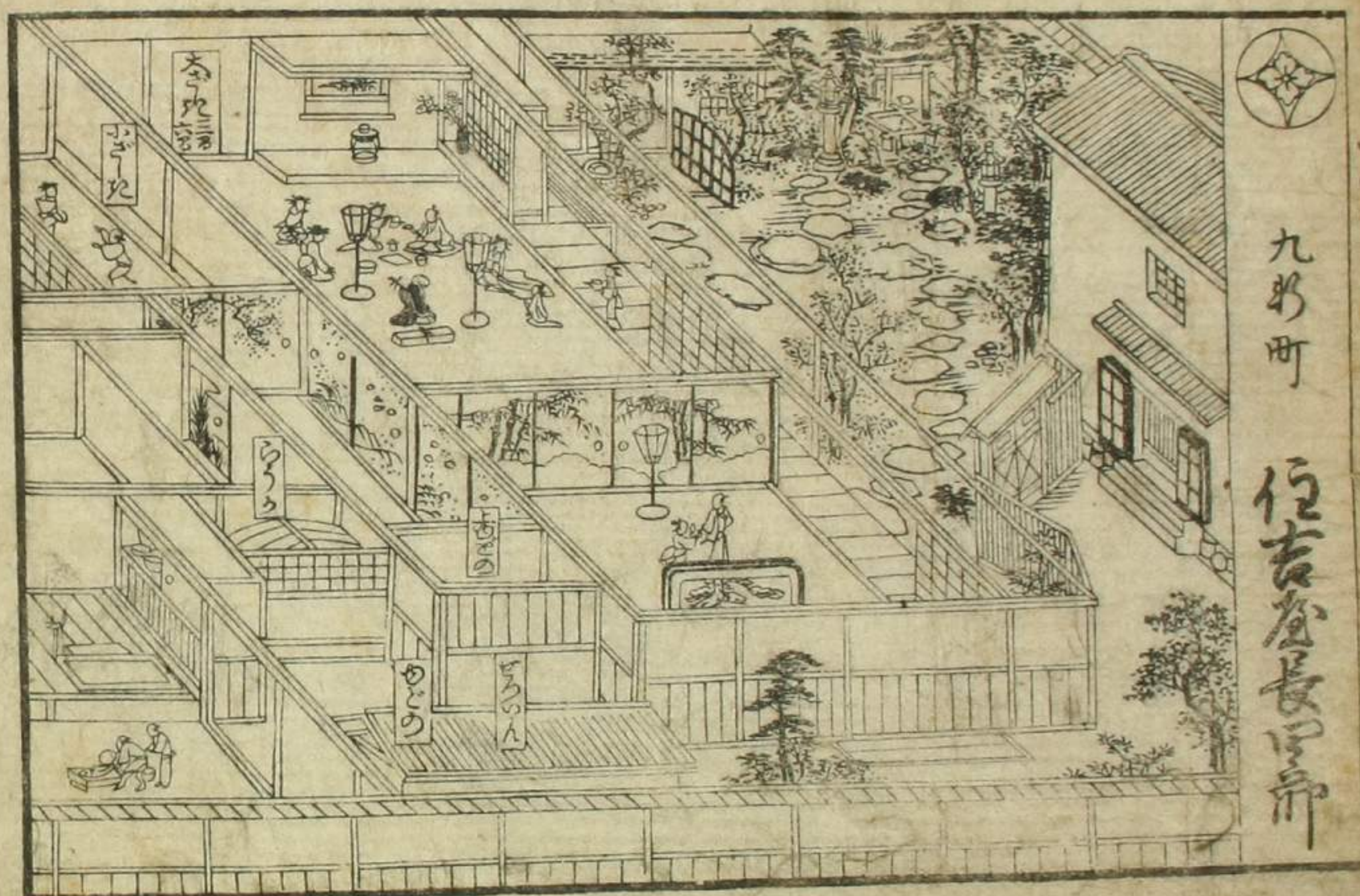
九折所 井筒公伝去傍

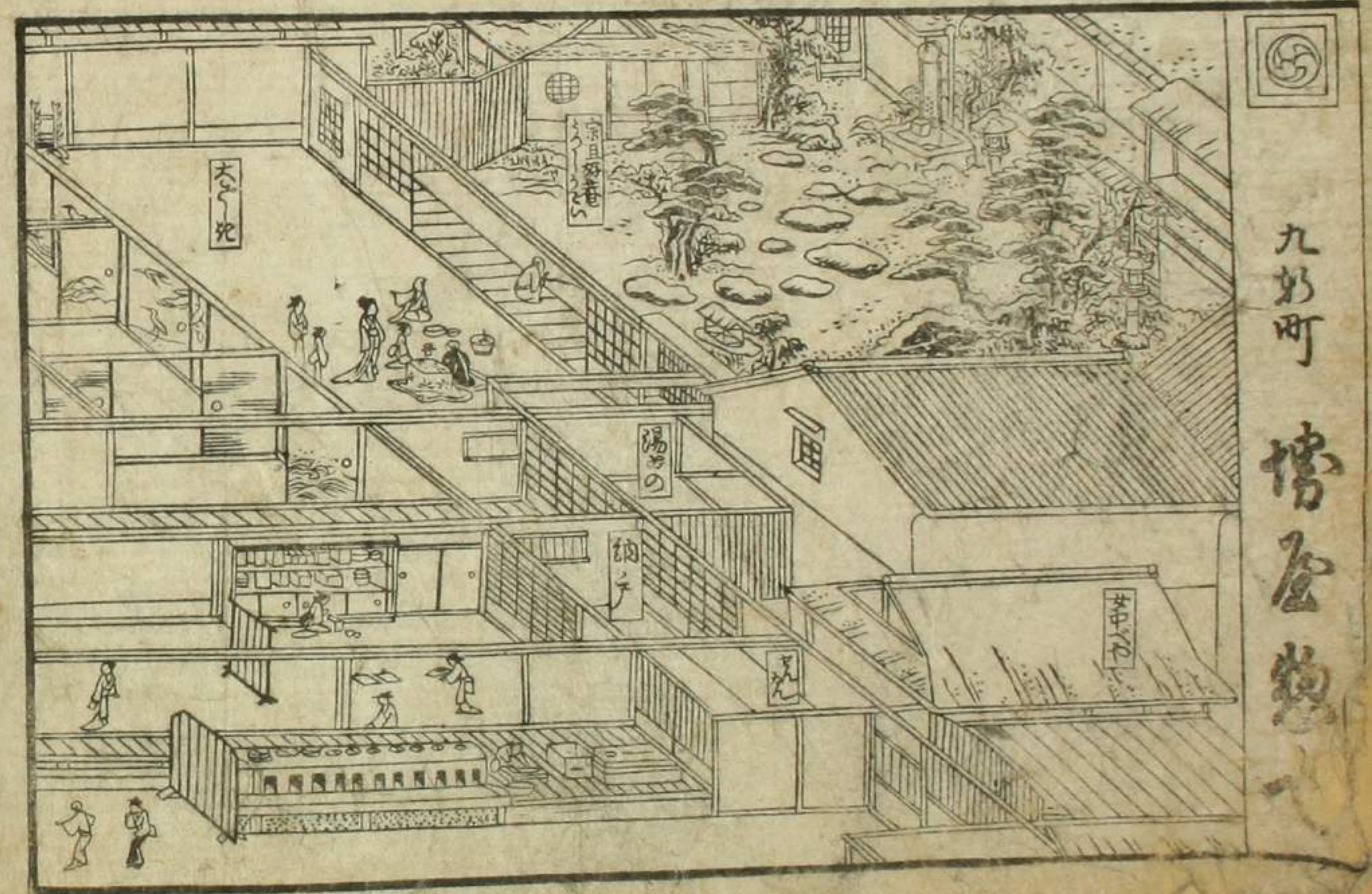
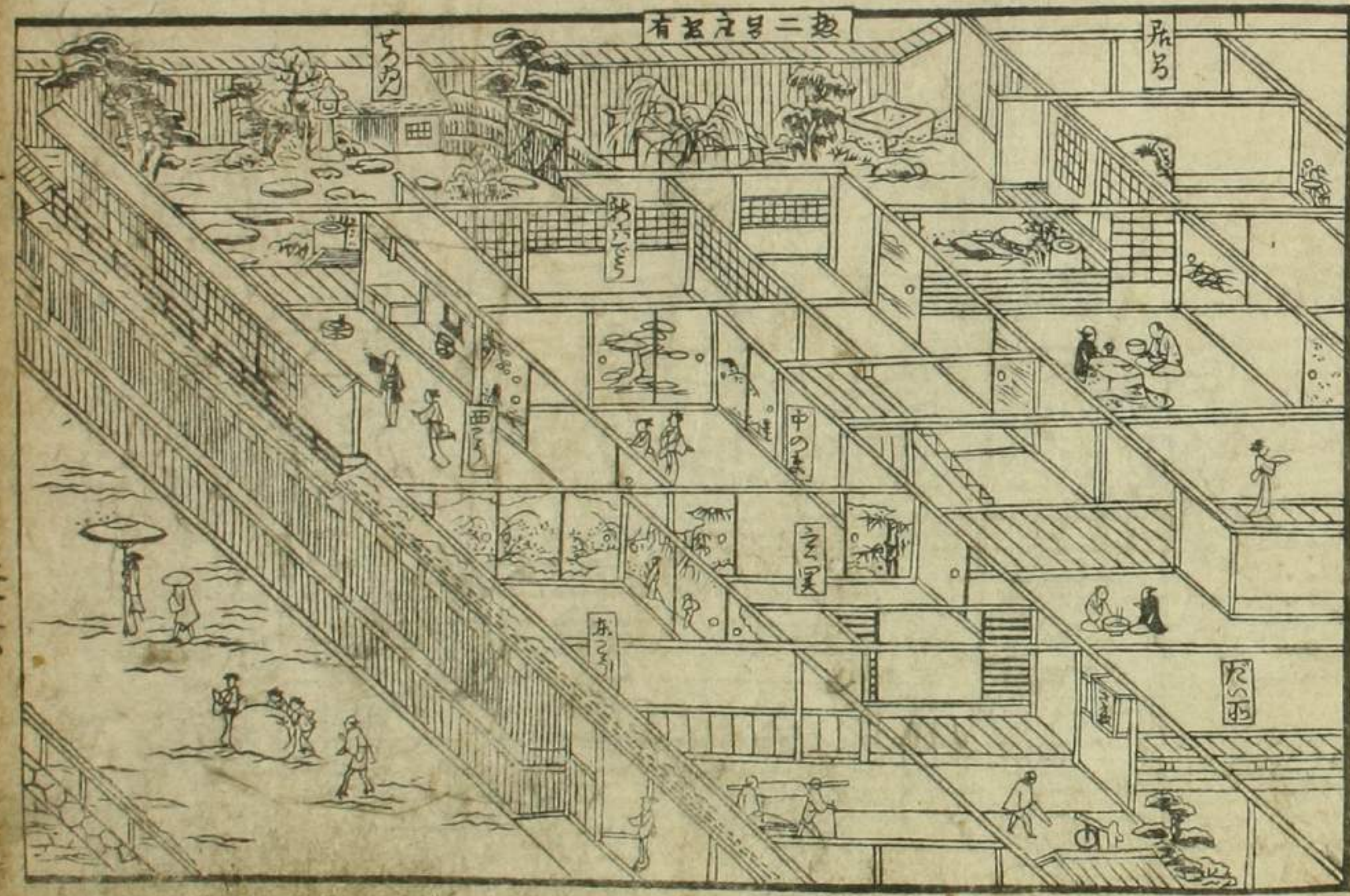
井筒

二之巻

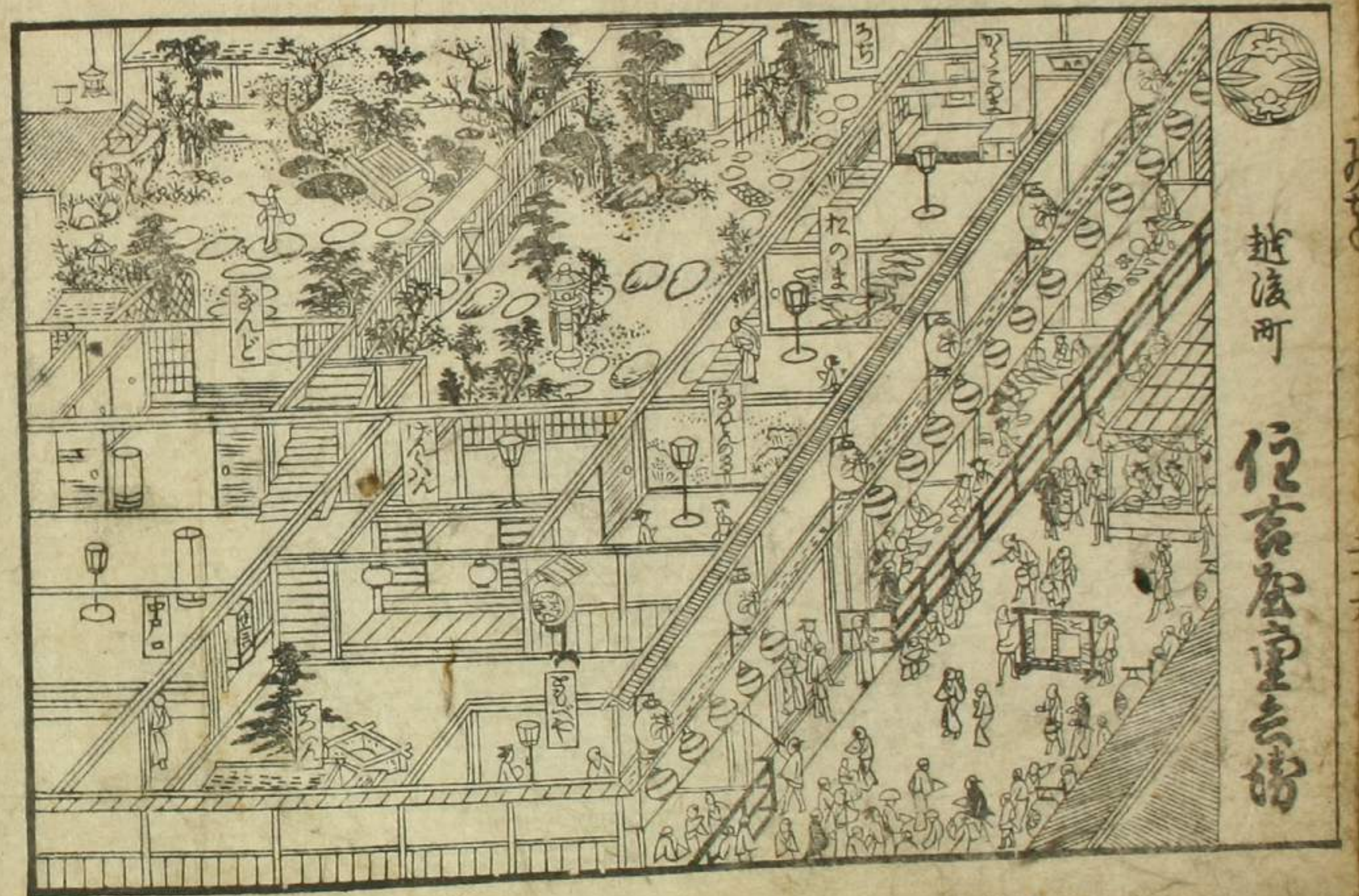
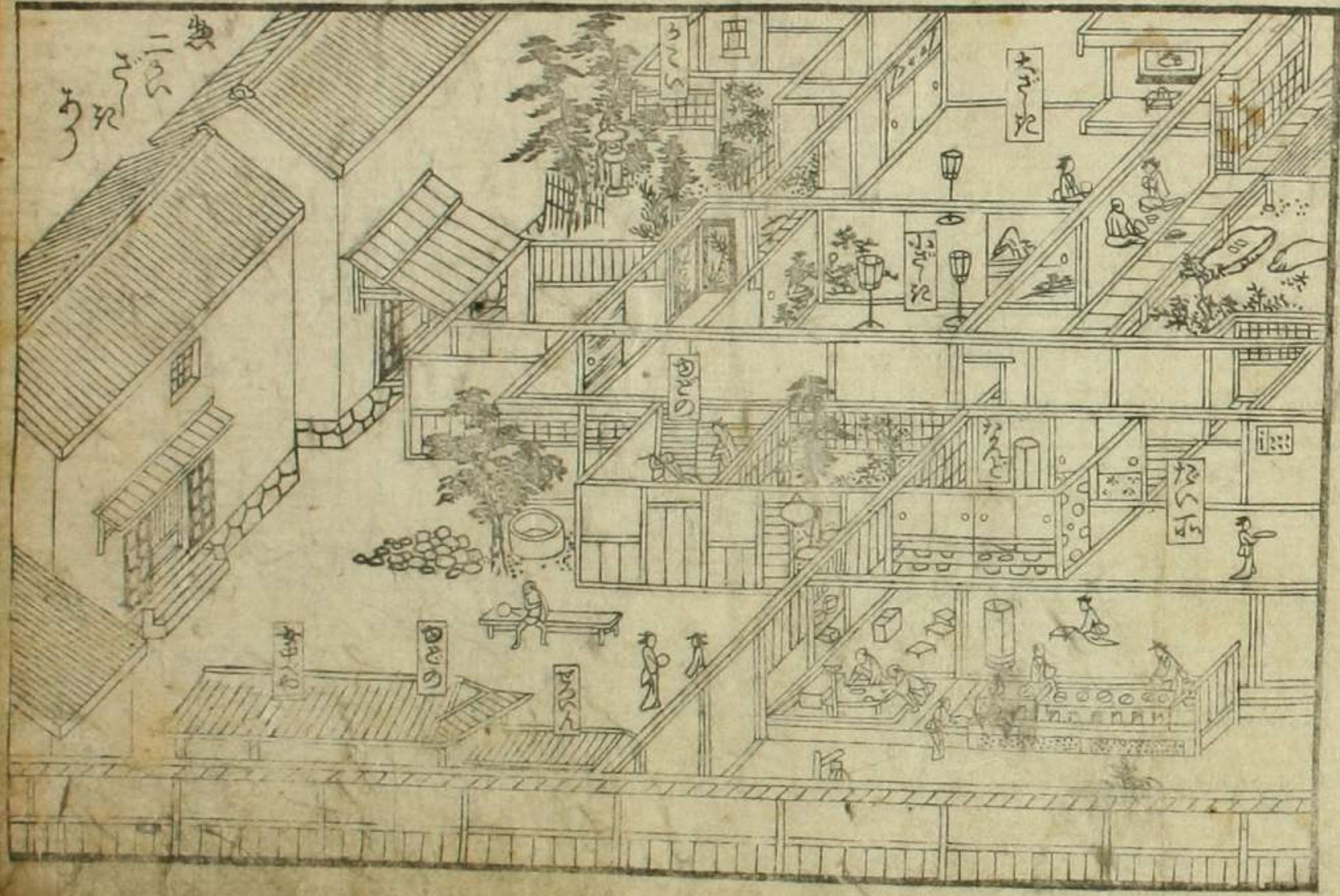


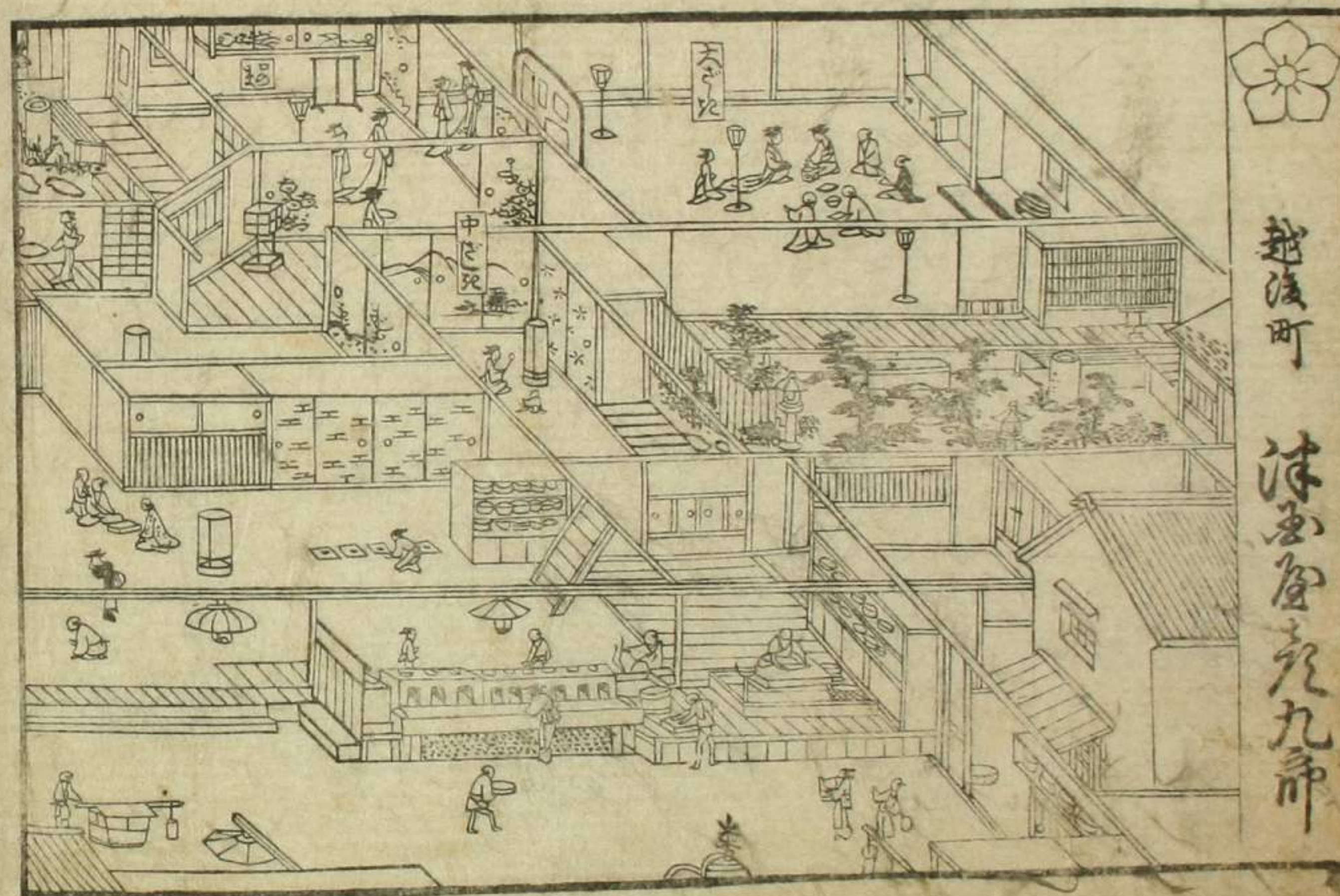
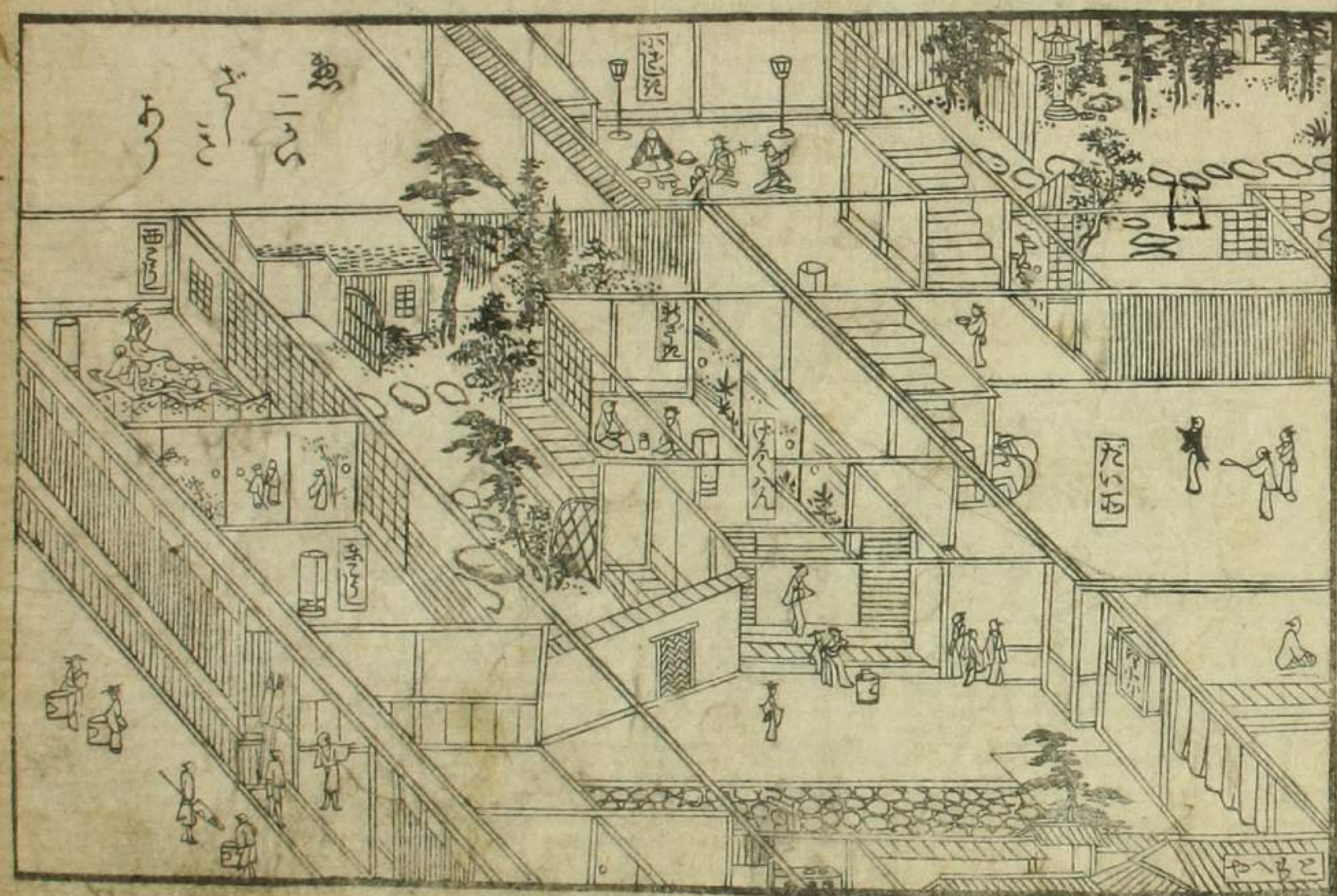
九折所
仁吉倉長





九町町 湯屋敷

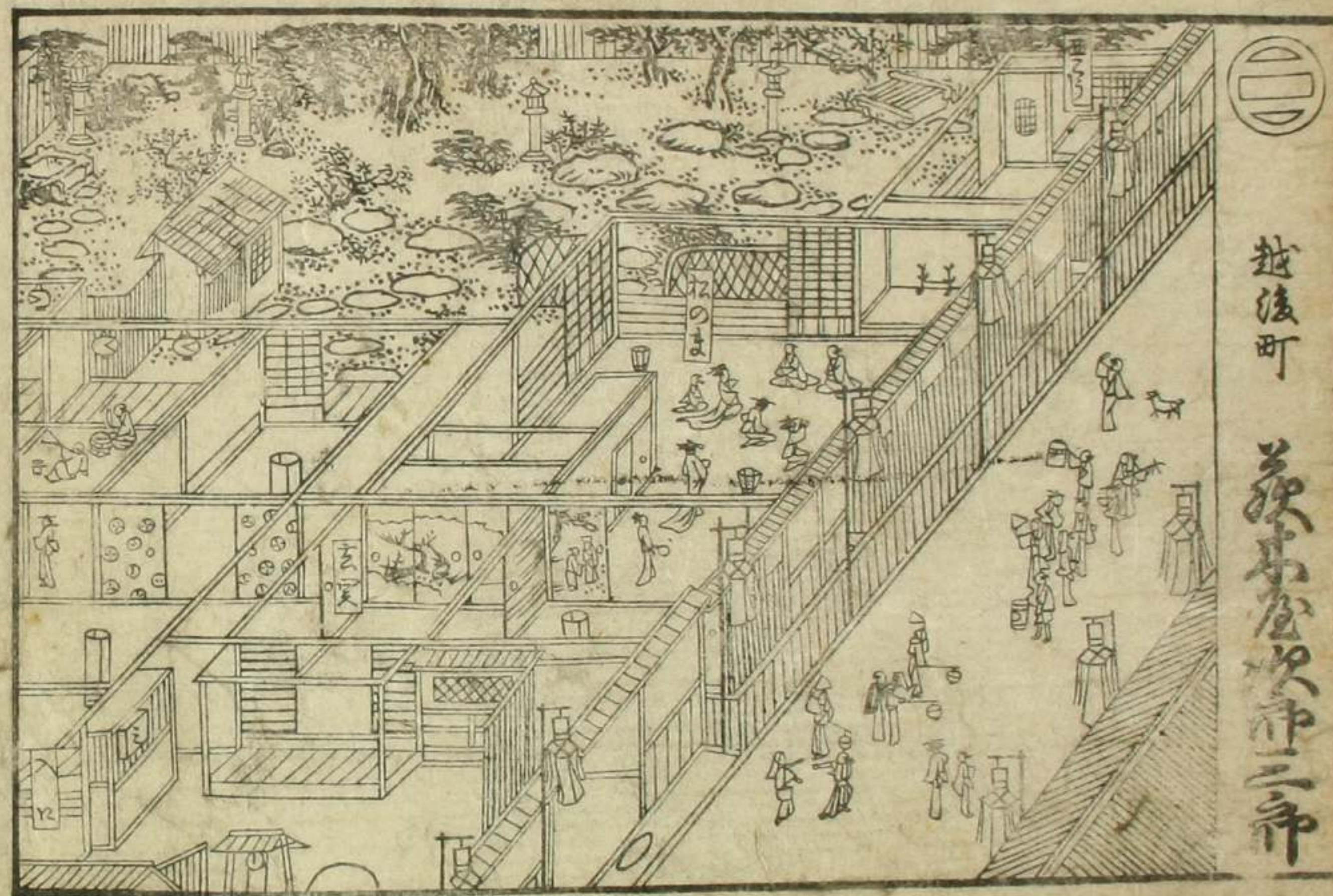
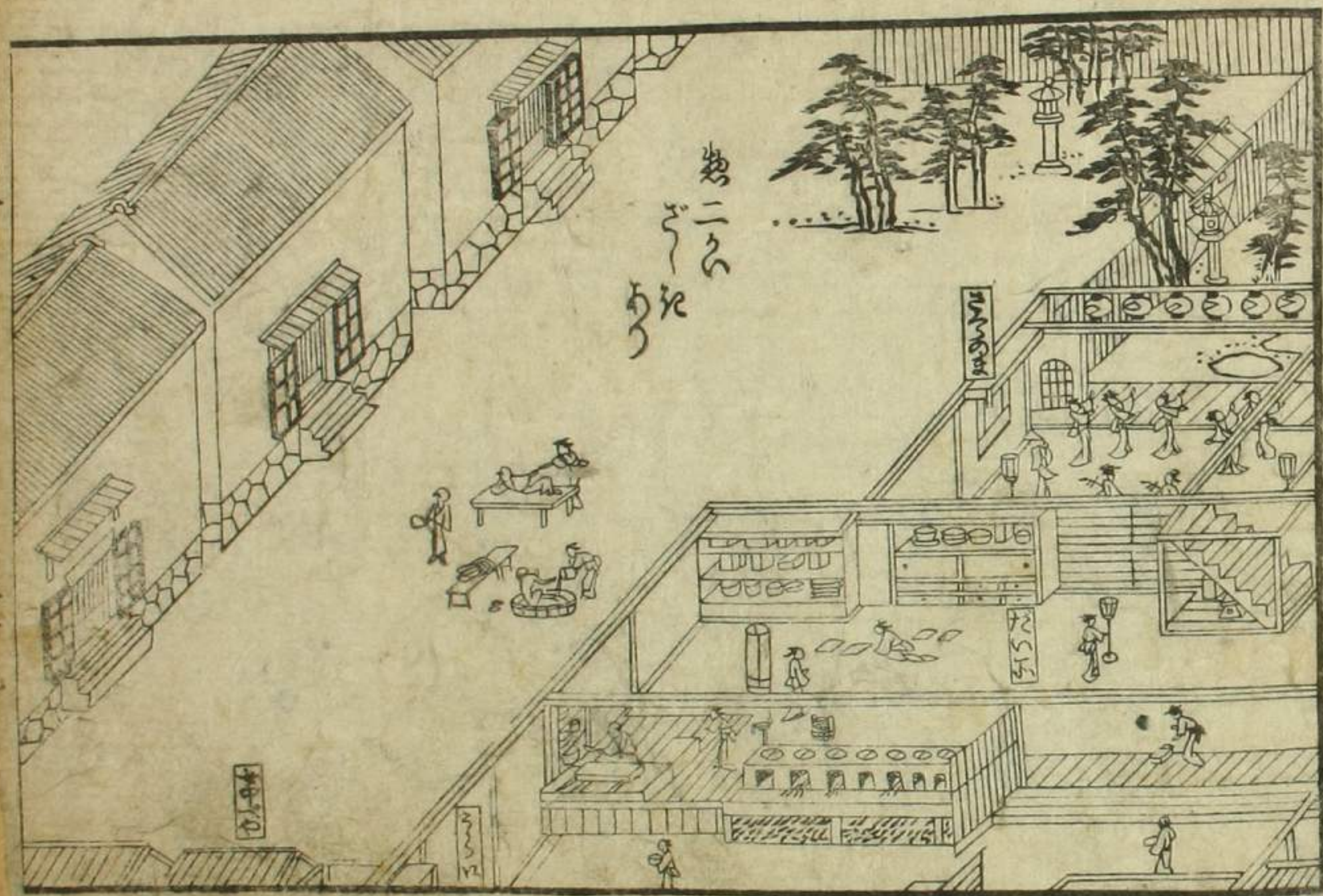




越後町
浄土堂九節

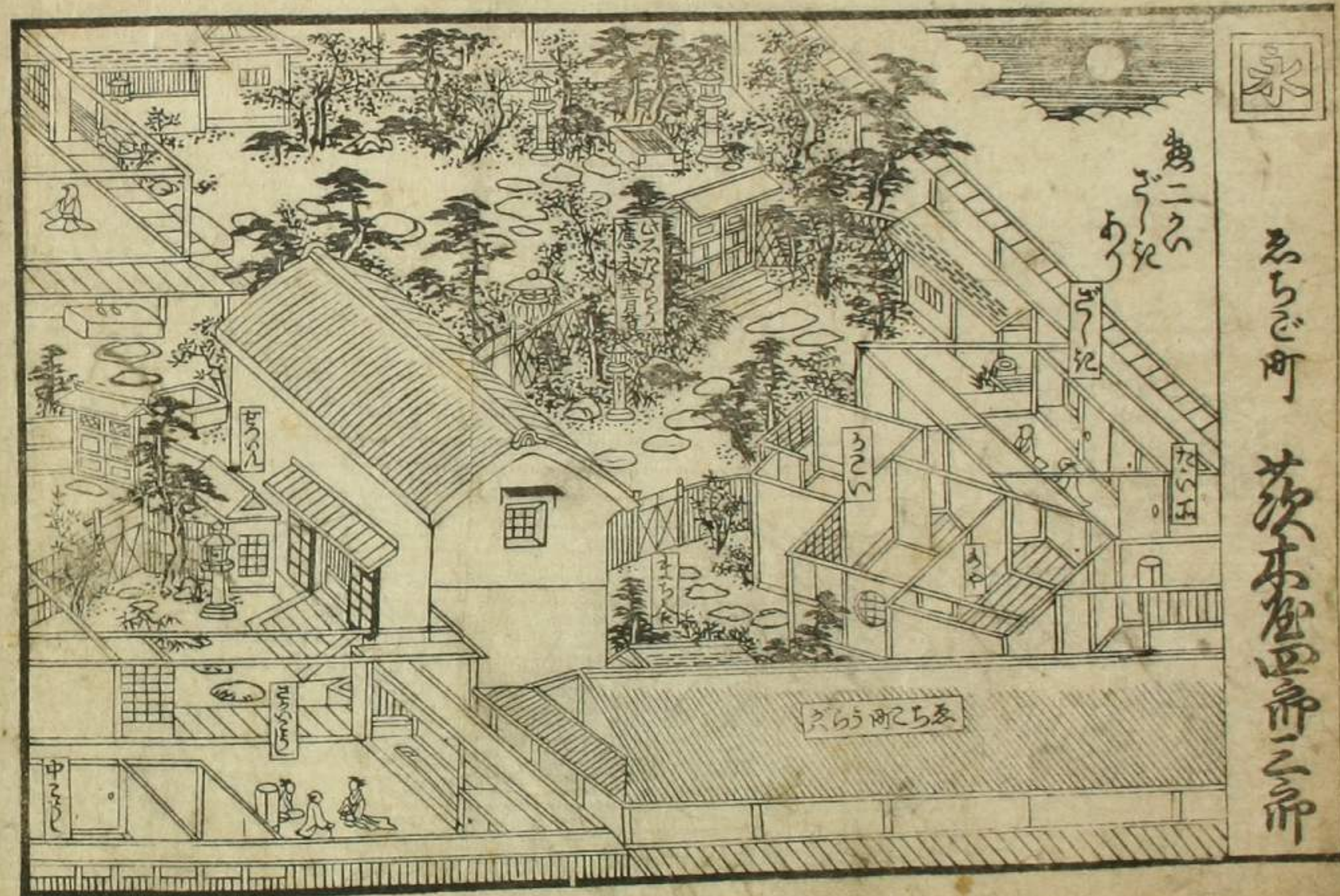
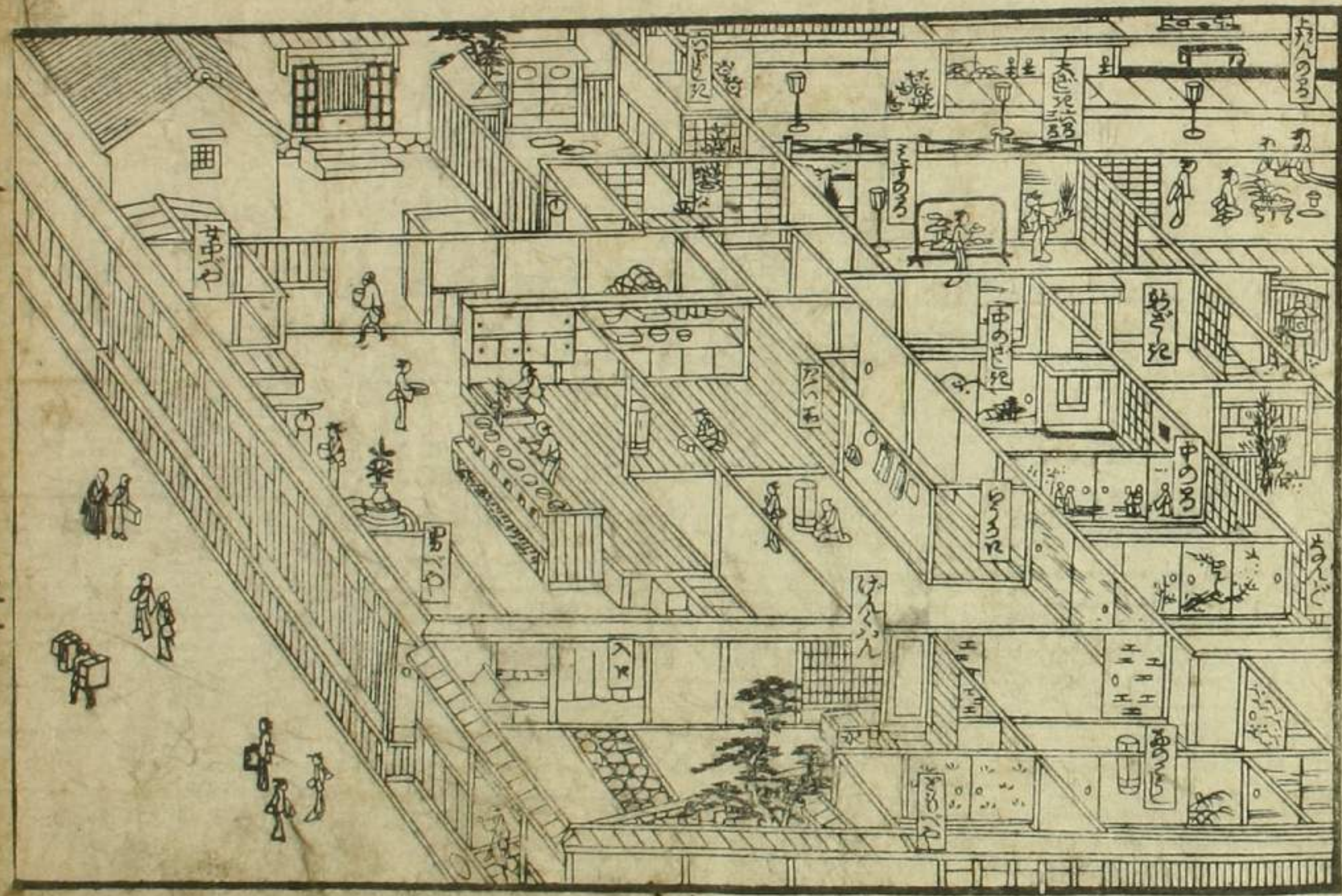
あまの

二六



越法町

後中宮次郎三郎



永

あらしの河 茨木を西岸に流

あらしの河

あらしの河

あらしの河

あらしの河

あらしの河

あらしの河

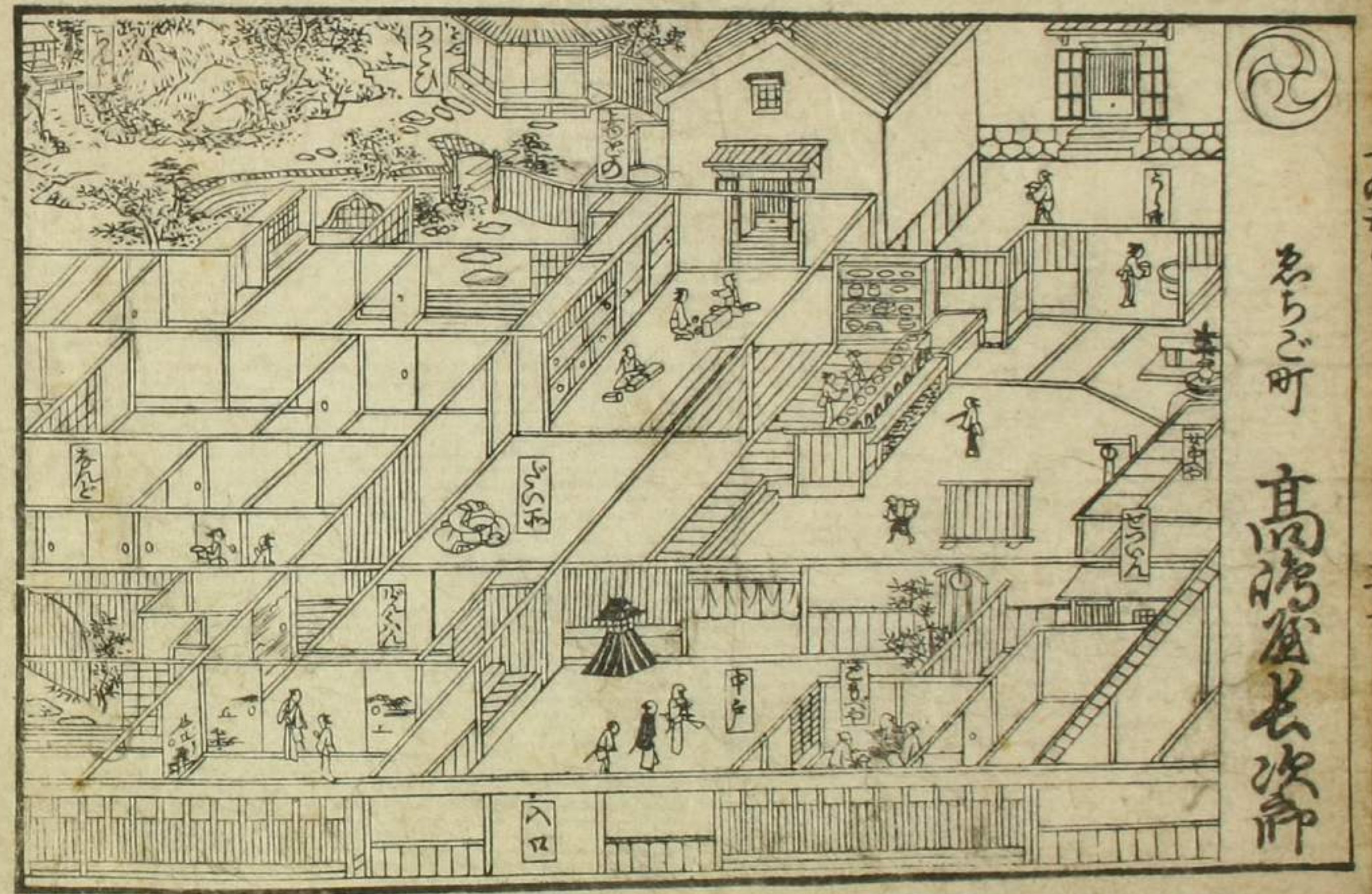
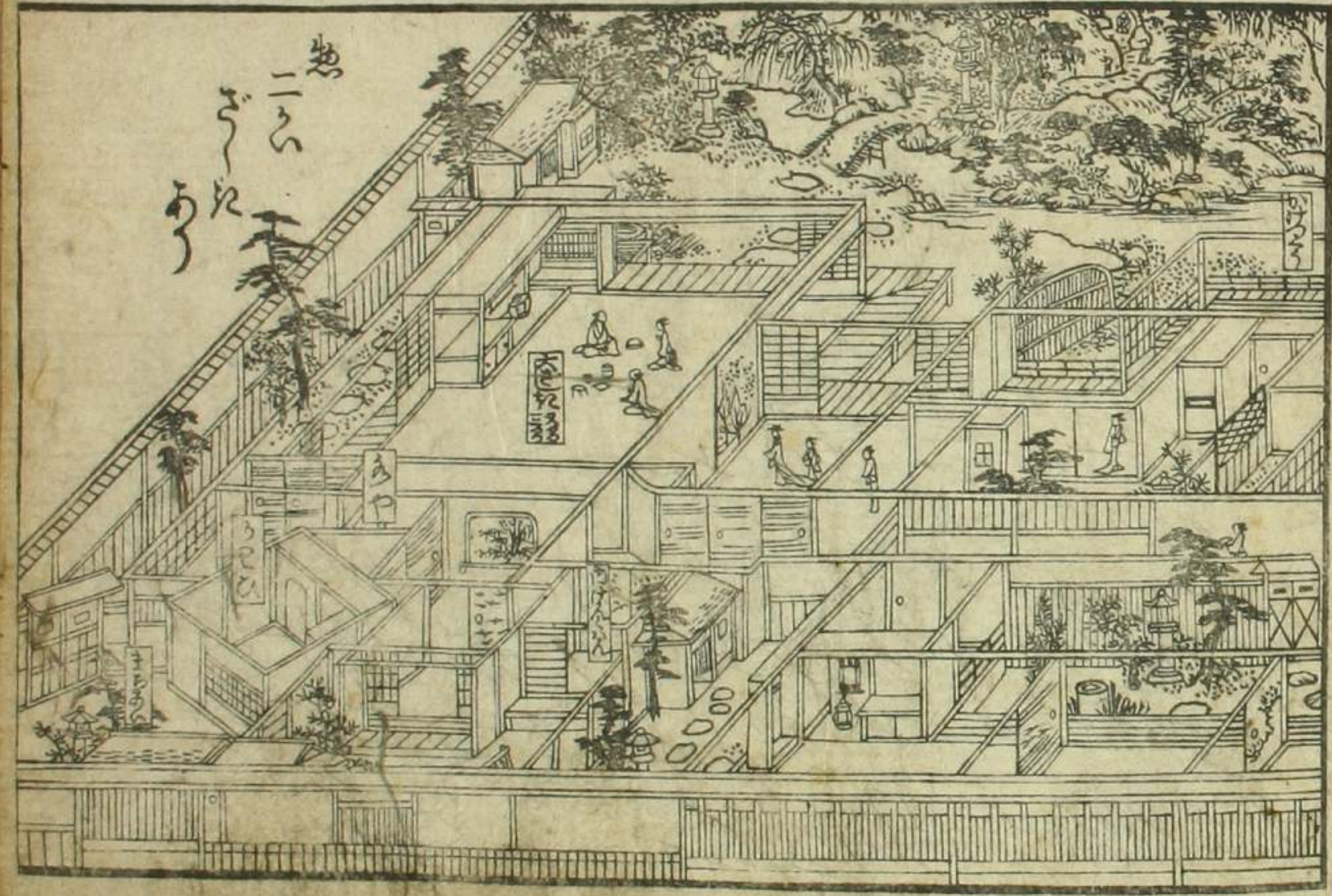
あらしの河

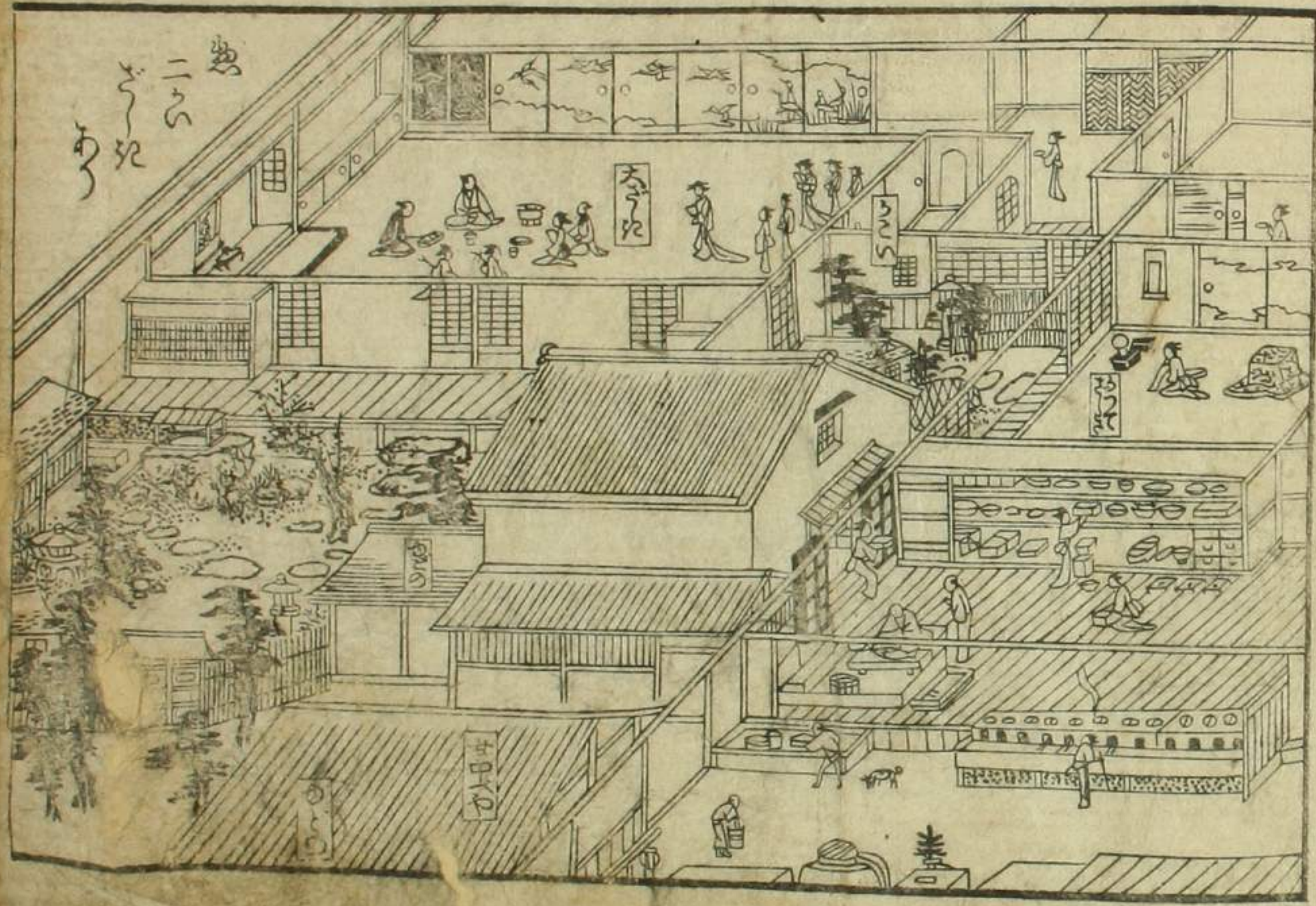
あらしの河

あらしの河

あらしの河

あらしの河

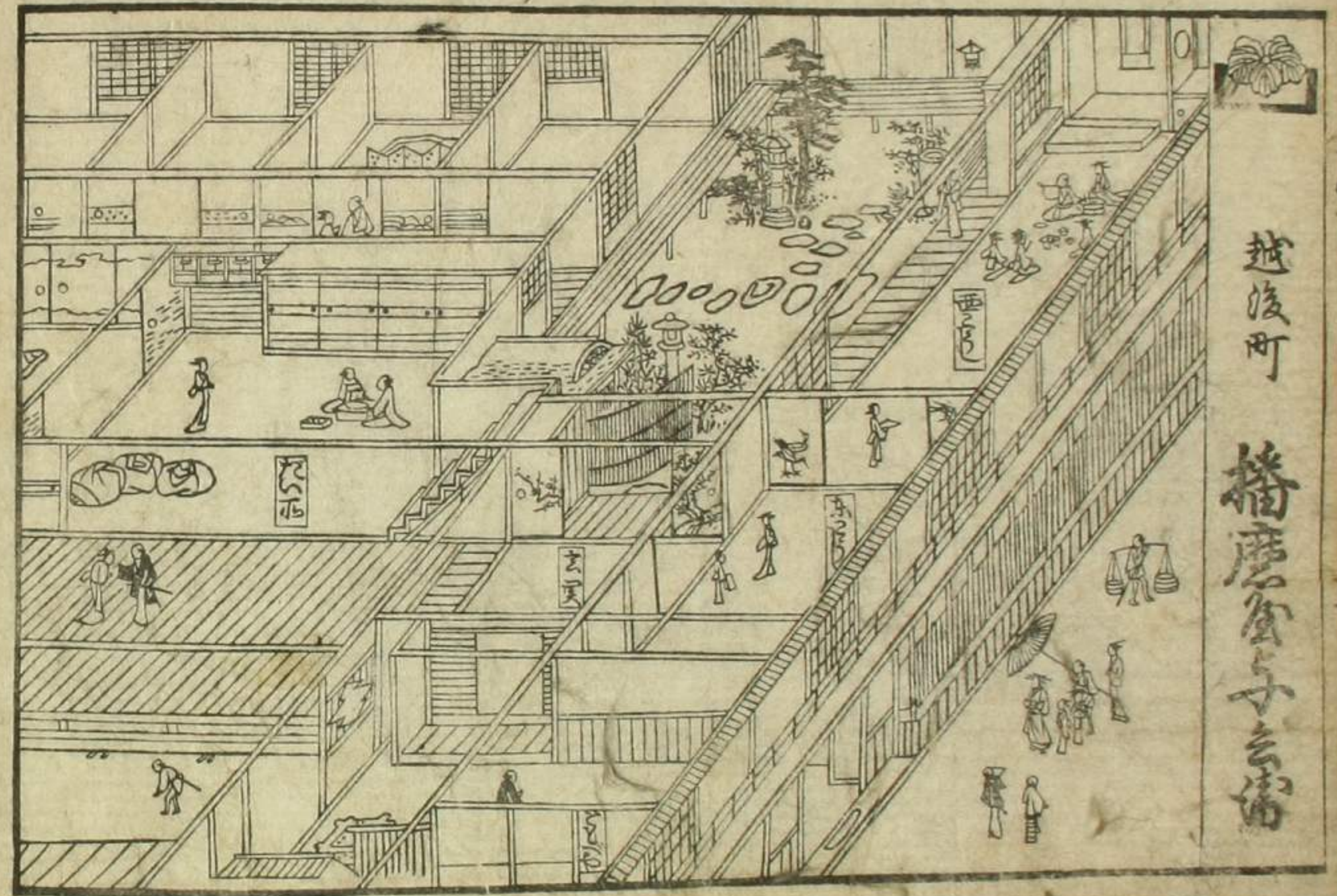




二
三
四

越後町

播磨屋敷



州

町

○里詞抄

吉田屋といふ揚屋二軒あり

・金六方と

・森屋つ方と

いふき屋といふ揚屋二軒あり

・白布と布方と

・又次布方と

とみう屋三軒あり

・長江布方と

・あつらひ長世布西の方小住吉屋

・かき屋とくま屋といふ中一のとん

のえと云ふ二る九軒あり

・根吉方と

よとすみのえと云

と云ふ

・京を長なつ方と云ふこといふ
 又三羽鳥といふる家何れもあはれも
 ・三羽鳥の方と 赤の字と云
 ・四羽鳥の方と 西の字と云
 いづれも風雅か吳名を呼ぶ事也
 今いづれの方と云ふと家名の別
 別な事と云ふ通用と云ふ事
 のぞく風雅と云ふ事と云ふ事
 との也

○古史の口

一 夜毒の辨
 一 抱女解

解女郎の口と云ふ事と云ふ事
 古史と云ふ事と云ふ事
 一月子軒と云ふ事と云ふ事
 一 抱女と云ふ事と云ふ事

古史の口と云ふ事と云ふ事
 北也又秋の口と云ふ事と云ふ事
 抱女也

古史の口

定家卿長

一 依之と野上の事と云ふ事
 抱女と云ふ事と云ふ事

といつて古史の口と云ふ事と云ふ事
 抱女と云ふ事と云ふ事

知極と云ふ事と云ふ事
 け富の抱女と云ふ事と云ふ事
 やうに云ふ事と云ふ事
 けりといふ事と云ふ事
 下思

又園の下の名と云ふ事と云ふ事

住民の人を宿りて暮らして一室を以て
居るにやとてあはれまじきことありんば
へりし方の影を旅宿の一夜の
長小むとびし生涯のこれをして佳境
の流人の夢みく下界
津田の宿の好辰大破の虎まを川の垂る
たどるよ一こけをば一夜まを
おがゆきまを今も今もおがゆ
まうなき花君あふいあへの限かたは
あり唐土まを遊女まをころ影ひり
目をあもあはれ

新古今和歌集 有原朝臣

一歌のうらまきもさたけの影ひり
うらまきの影ひりもあはれ
とあはれ今候御涙をどうし

舞々しむん都の水をさうしき云地
故かし高津の水をさ自由か所
川口あふん水もさうしきむし
花かまはまひ系竹のまも人もかく只
情をさうのまも一口小論じがど
寛文年中ハ南洋の船難昌成さん
しそ名なき女師もまはさしむん
げにおまふ法華と専らむげこころ
まも古人の機おれし仇踏の條お
あも高所ままの奈白ぶるまも
たよまも

児の親をさうしきぬしきさ

取のよけのあはれむ
掃さむよかたことさうしき

男がまは原をいふまはし較懐か

まはし原の

今もまはし原の

牡若いつらんこそそはぶつ

まはし

ふ雨やいとお雨と懐いとき

此の原を

ゆらじ

柳まけまののこねらるる

まの介いれを畧と今もあはれはく
何れも風雅あるまのこあををい
まへゆらぎど南津のたまといゆる
まのい中いあへの柳君らどあも
おらるるまのこねらるる柳傘あり

天神のうた傘いさかけどたま小
限り也といふへい列舟はれらるる事い
ありと

▲夕音の事 舟初夜

初柳町を許合をりれー原之原を
といつり浪人の京橋原の内世原を
の長とあり今小まらるるもお懐く
まの家船も今一人の林又市原と
より人まは日原小舟く女市原
とあ天正年中よりお懐く
三羽居世原を傳つてつり日原橋原を
まの原といつりまの原中といふ
ありと大坂へ引渡るるはあふまや
二廓中といふもなうらがまの原と
あり故をといふ二廓小大坂へ引渡るる

比叡寛文十二子年也けつ々々
いふ馬大坂中のけつ々々
おびとくはたかき毎ぐく川をの見る物
たつとくはたかき毎ぐく川をの見る物
まがきいふ物を作るとる田津名木の
揚屋のけしを傳ふしとるのけし
ちいづれ系女師のけし
ありし中やもたな方とていふ物
英艶あり幸珠は美若のけし
合らぐとていふ物
其こる英艶とていふ物
小のづとていふ物
今もやもたな方とていふ物
より大坂のまきき懸るけし
けしとていふ物

一人に自願より揚屋を連あはさ
流るり一時は客來りけし
女師をささこのあげやけし
持せ置其る小物はありけし
を見合又其英艶はけし
とていふ物
全盛の思ふあはさるけし
延宝又年の秋のけし
醫者療ふはけし
よくも信る傳をけし
とていふ物
仏林もけし

源氏物語の御成敗式目六年六月六日
 いづはよと病床小死と河の人ありむ
 事松を離るる若かざりぬのた
 かくももまきんぬれは翌七日西宮
 浄土寺小蘇里に法名
 花岳芳春信女
 と野今お浄土寺小蘇里の塔あり
 之羽屋一統絶む奉圓を神代とる
 也

源氏物語
 公里も中をいそや侍心まらぬ
 立おんくもち記心記
 之羽屋世傳三傳二代目とありまや
 之羽屋と云ふはり流くお讀
 今の羽屋孫七羽屋弥三布衣家

元祖林又市郎末子末子所ある
 家名あり

後屋侍
 河波信戸

といつる若井の依りおまは侍れあつ
 こいさす後々もまきまきけ縁向の
 他小河波の太屋といつることまは河波の
 太屋とまきまき由縁ありぬまは
 大屋小太屋河波屋事とまきまき限
 の人ありけまきまきにまきまき
 も縁の外縁切ある世傳とまきまき
 國をがあまらまきまき初九折所揚
 吉田屋表屋方の方ありまきまき
 まきまきまきまきのまきまき
 後十布衣二年二月二方よりまきまき

友林の二月と云ふ所記をて別後居
 仔細の事後十郎と云くけい世實の
 仔細として大よるやうなり同半小石の
 夕者相と云と四夜かし翌年四月
 二月よりまて夕者へ周忌といふ程云
 をあしこ年忘又七年と云三回忌
 十七回忌とくく返しく延宝六
 年年より坂田後十郎死に去せし
 室氷六世年と云夕方在言を
 十八夜出たりと云くく人あて
 ありしを先全く夕方感懐
 と後十郎の妙子と云しは年委の
 身集子ゆり 近代處三又而差
 沢村雲宗 基毎大當り
 此塚の柙ぶくも 鬼貫
 あんれあり

▲紙中の事

延宝五年中本村屋又次郎抱小紙中
 ころろ大文と云る色つり少り
 けりまた中の糸の上郎中足抱乃
 くんち也押もからまごうのち小
 りのてくゝ急の揚屋入いりたより
 ありし柙をかあく通り
 柙の名をあそし程のゆゑ又ある所
 あげややく我お方の名は足
 くんちと云られた下布あくるんて
 けんとして時益見苦りしを俄に
 おりし付湯臭のぬぐりめん三布
 をとまらふしは細付てあし
 よりけ風を紙中禪といふ紙中
 禪の紙中團つり始りしは太き

俗説あり、珠子其時の大臣にたりし
の夜、法衣の袂に、かみかみありと
掘り、やると其外は、たまふはき
さゆく名の所り、うづら坂ありとも
多、掘るきゆり、まゝも、田舎に

▲あげまの事

依後、号子之、信家代、愛蔵、
能かくのびく、画あり、ゆんま
信、誰が、ゆい、初、や、ゆる、家、主、屋
と、家、号、小、呼、び、也、去、り、信、も、町、ま、
ハ、依、後、号、子、初、信、家、代、と、い、ふ、事、あり
寛文、十、年、中、は、家、の、抱、小、吾、妻、あ、し
いつ、る、ま、ま、あり、と、誠、中、夕、青、子、も
あ、ぶ、か、の、金、成、世、と、あり、一、思、
す、が、れ、天、性、位、と、其、上、系、行、一、通、の



つ、ま、及、を、以、万、葉、系、小、通、と、法、衣、の、袂、に、
我、一、と、ま、ま、ゆ、り、事、と、多、く、其、中、小、橋、及、
山、中、村、小、坂、と、多、く、た、ま、と、い、ふ、事、は、
あり、り、る、あ、る、こ、ま、は、津、の、あり、あ、げ、ま
の、名、も、ま、ま、に、ゆ、り、九、折、町、井、筒、屋
と、名、を、つ、が、方、あり、け、あ、げ、ま、ふ、ふ、と
わ、り、く、と、初、一、と、ま、ま、夜、長、と、い、ふ、事、
と、め、ま、ま、ゆ、り、初、信、と、い、ふ、事、揚、信、の
あ、ま、び、井、筒、屋、の、屋、敷、を、建、立、し、
や、り、り、け、大、に、と、な、り、定、改、三、の、柏
と、い、ふ、事、も、あり、る、事、も、あり、る、事、も、あり、
計、が、く、し、お、も、ど、柏、の、う、ち、を、打、
し、り、法、衣、の、家、遠、を、い、ふ、事、も、あり、
け、井、心、は、屋、敷、を、命、と、い、ふ、事、も、あり、
ゆ、り、の、事、も、あり、今、い、ふ、事、も、あり、
ゆ、り、の、事、も、あり、今、い、ふ、事、も、あり、
ゆ、り、の、事、も、あり、今、い、ふ、事、も、あり、

大江山村と云ふ門を世に山邊と云ふ
とむつひかへり其はも松を成すあり
ありまやま松作りあはま松とせ
と松と云ふ松うひせく山邊と云ふ
そのこと松とせ二百あり松のあり
其は女郎の身の代二百ありと云ふ
やんまりまやま今も千金の懐り
もま松ばかりしはあはま松と氏も
ふどま松後我下松画く賀と
まれば

身のあやま松の
くらあは松

そのふりのあ
松の山本

と奉付と云ふ今も松津山國
と中村某小作の二軒傳事と云

新門松

左所駕

ふどい松作り松理文句もいふ
あはま松由縁ありと云ふそのあはま
あはま松又い松山と云ふ名も
あはまありと云ふ松を思ふと
松はよ松りといふ津に神お
の地をらや若より日々に名を
くら女松作りあはま松小松
あはま松六つ作の人や其松由津
松山と云ふ松と松をいふ松
といふ松理文句小松作り
さ松と云ふ松の夜松と云ふ
松板をいふ松と云ふ松
くら松と云ふ松と云ふ松
玉松と云ふ松と云ふ松

長持の方 今の如く
 又其は 西人の
 十法を 一竹の
 付門く 小立から
 靴草し といひ
 それと 二品を
 作者の 祭帳也
 今余は 奉
 今
 福

源氏物語

あけまのしよふまのしよふ

あけまのしよふまのしよふ




あけまのしよふ

後拾遺集

信原基輔

契りまのしよふまのしよふ

とてのまのしよふまのしよふ

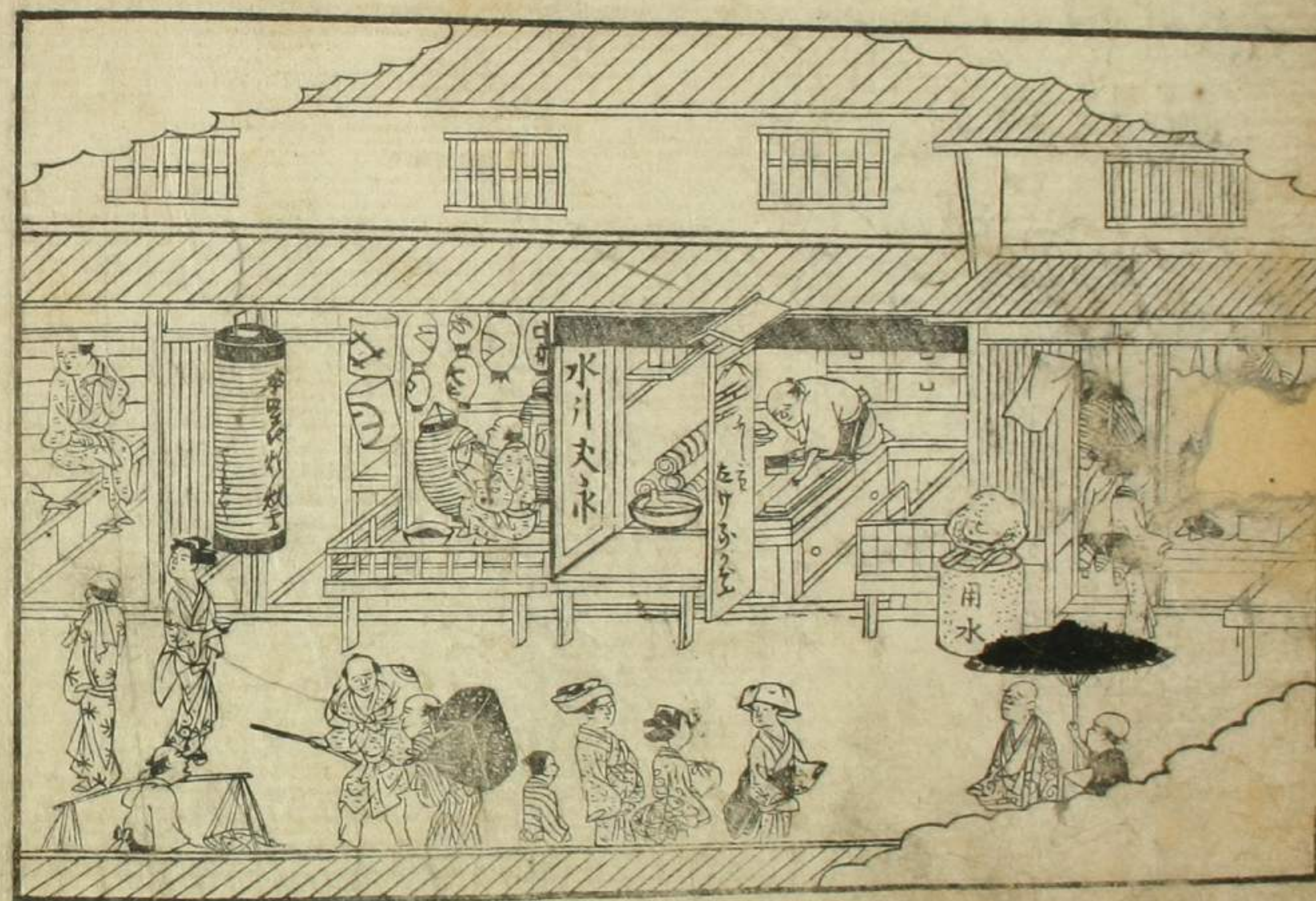
● 傘印 	西 法衣也	東 扇屋
	上村屋 	西 扇屋 

● 長持運送
 兼 羽友通用

一 右 丈 大長持
 一 天 中長持
 一 引 小長持

右丈中心に通るもの女長持の





揚屋系をうらやみし人よ来る時
女小ウラウラツと美なり也これ古代の
櫛の飾りしや也と云ひはるふ人々
は心もくも新殺の女郎は内も
候くを又識まらざるむとの也
新殺ゆらぐ人の玉加例に廓中務武
ありといふ事也

○呼込女故實

正月二月三月七月九月
式月神月之臨時も新殺を日
に揚屋系をうらやみし女子とく
女郎一人は中居一人死にひま
ありこれも程古の毎日くは候あり
一今い候くは中日中あり
乞高津のくらまの右更也

○勸を芝居を級不打由縁

芝居のかりり式に勸を級お撲多
大坂町中を級打くはるは其の
たいと通り筋西の大門のちかを
おやめを賣取へかばあはく打と
けき大坂中を級ははとあ
しるはこれあらむとぞくりく
所の人よるぬべし

○夜見世盤名花

は敷間敷の面は夜見毎ふし
豆中ありし小延室を来すより正月
より十月晦まで夜見世は殺先
しるは月極月二ヶ月の書浪子
東西の大門開長し小そのら

享保年中又乙卯月極白二ヶ月
もれ教先ありて今い年中夜見世
ありて白月夜あざむき髪をばり
くきおとらり

○限を被作法

高津の廟の附の志を被夜のみ刻子
曲輪中たいらり口を青かり入也あり
人々をいたはれとおまゆ神を遊遊し
大門口をえあはせけた被と得りて是
はを被うりとの廟中揚屋を幕屋の
法をそのまのくくのまきりしおくの
短短焼の光白日小等

鹿の角先一町の
ころれうち

君粧俚評

系的女前ふ江戸のまらきりてせむの衣
とせて大坂の揚屋でもそびていひ云は
かをも揚屋れを双らふも申さう紋大坂のと
ふたん事しに又女前のむきも事の弱ま
のよびれをまがび江戸の別法を離きを侍の
かりくぬ俗好むまがむかひし大坂の女前
お大坂の衣裳で大坂の揚屋でもそびてえ未
大坂の氣性變化したる地ありてめばし
のうはつらて又後世の江戸もて離き
とておまら地と下しむもまの事性もの所
う系江戸の中膚をたしては海くおのう
是梓客のおしとていふの事平たう
治と初まのぼりの白蓮花 菖深
又女前の情ハ筆おもていふは

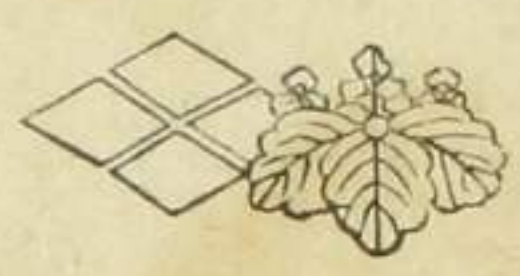
Handwritten Japanese text in cursive style (sōsho), enclosed in a rectangular border. The text is arranged in approximately 10 vertical columns, reading from right to left. The characters are fluid and connected, typical of the cursive script used in traditional Japanese calligraphy.

Handwritten Japanese text in cursive style (sōsho), enclosed in a rectangular border. The text is arranged in approximately 10 vertical columns, reading from right to left. The characters are fluid and connected, typical of the cursive script used in traditional Japanese calligraphy.

ちのり
 らのり
 おのり
 ちのり
 らのり
 おのり

ちのり
 らのり
 おのり

右ハ唐書地ニ一様トナリ
 塗相細付合銀金物



桐の戸ハ
 紋のよー

ねり
 ねり
 ねり

右書付ハ秋原殿御筆のよーかくい
 めも御深筆を為下事修持の
 身とく難ひ事たろ御小日本中
 おもふ事まもも御深筆のよー
 名之の御威あも御深筆のよー
 南八十包と八河州の客人とや播磨の
 客人とや御深筆

同福之模様



織唐
 地厚くくは立小く裏通るる錦子

種はともたけいりて古風な鑑賞を好む
 近代の花を好むと云ふを好むと格別
 右ハ名を以て命を命がたけ
 名鑑ハ

吉田をたつ方ふまゝのあり傳何ま
 の方と花の中ふりしこまみつ
 まうら

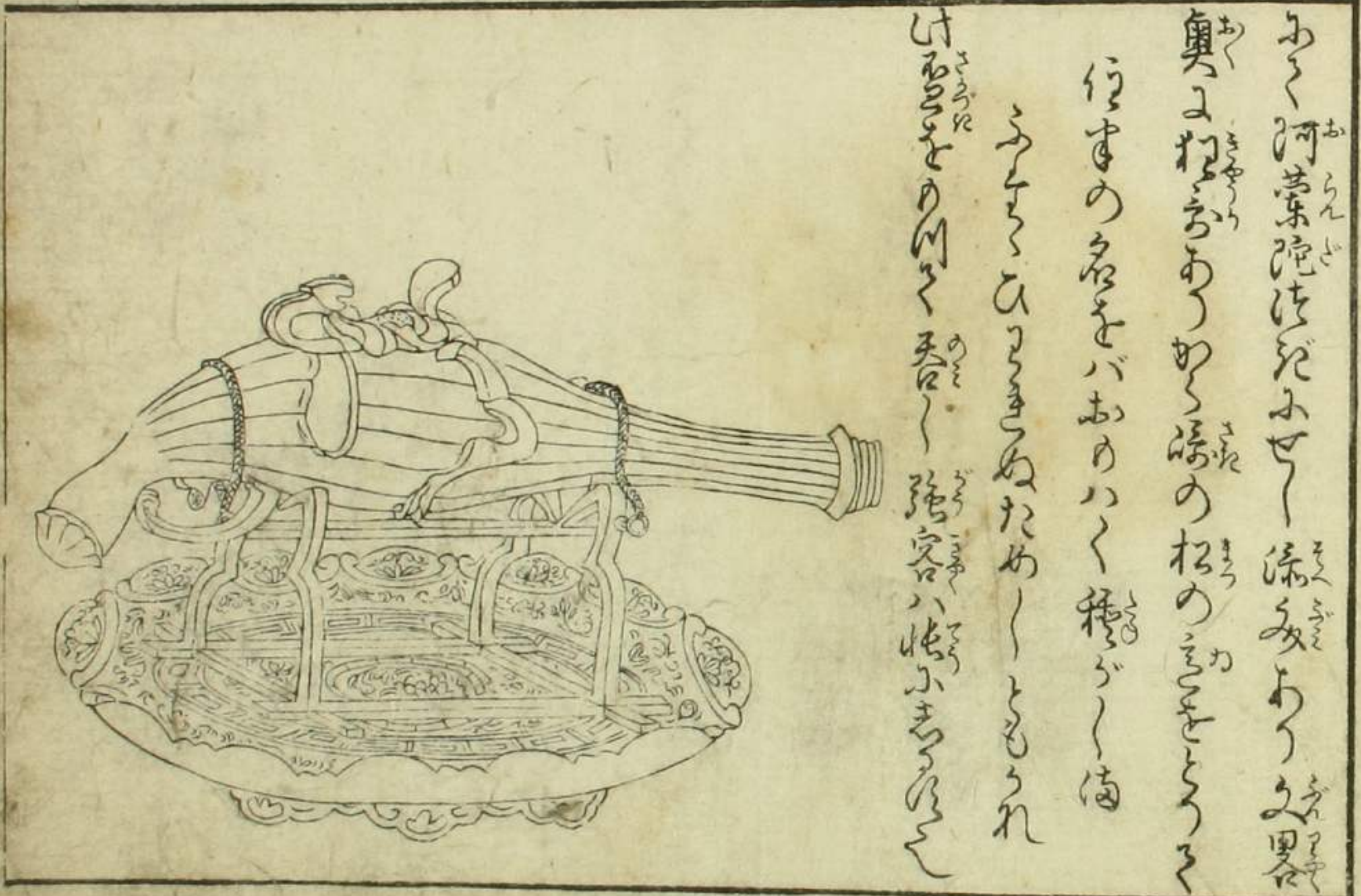
又まゝのふた奥とて料紙煙箱わ
 ひの鏡ふあいつきも耐繪古物
 又之を務追悼の巻あり九三章あり
 ち中の一二を記す

たごうにおうくひすやむせびる元順
 又その香胡の流消こくら由平



又柳里恭の醉書一巻あり名たる豪傑
 名たる書樓席との醉書あやらん
 茂本を以て命を命が
 表の間續得野筆

又
 此
 物
 也



此河津院法苑かづのいんにありて流ながるるなり
 奥おくにねまありてわづらひの木のまきとら
 任事にんじの名をばあひやく種しゆがく備
 けりてその内うちにまきとらぬためとともうれ
 けりてその内うちにまきとらぬためとともうれ

同
 奥おくにねまありて
 物もの推おし之
 右みぎ物もの推おし之



任事にんじ登のぼりて流ながるる方かた小こ船ふねもありて自然しぜん而してめ
 任事にんじ登のぼりて流ながるる方かた小こ船ふねもありて自然しぜん而してめ



任事にんじ登のぼりて流ながるる方かた小こ船ふねもありて自然しぜん而してめ
 任事にんじ登のぼりて流ながるる方かた小こ船ふねもありて自然しぜん而してめ

世ハ 花言の意の字糸 けく 定言を
ちむらのいひう

翠ハ ようひのこころうかきまをいふらん
誰の一字ハむめくいさゆる誰よこまよ

とくおれうひはけよそのたきまらん
完ゆらこ

右ハ 陽易指士のハを字をいふと事
書おれく之可惜く今うまを以てすハ

よめやらんらんたの傍訓と
位も方 毅 王義之の瘞鶴銘を金竹泊の

石摺あり文字の中又令根の石を取あ
文ハ目出まう字を撰ぐまうむその中

寂寥の二字ありそ二字をいふと忠食の
爾字よあう高堂極まびくと讀二字を

爾くろり転向の眼目まうむ位す方事

物子を初め 一方を元字と云雷中絶所花子未
そわいつきも詠家の粹密ヒイキまう
かうようの粹好もまう一う信を長命
方動を庭筑い小様の形まう花いつのちど
とまうとあう一うまう人のいふあう
むうようの形ひまう一うまう一うまう
里の人々集詣と申古くは石をぬきまう
てもいふまう一うまう一うまう
あうまう一うまう一うまう一うまう



信者名を馬蹄方に能因法師の井の釣瓶
あう一圓リ一寸まう丸取らうぬまあ桐
う合勢う内是塗つたけと成まう概はの

安否はうらやま... ありや

とまゝに花の... けこ

まゆ... 老

右の... 井の

と... 流

里詞の篇

廊中... 白

ぬ... せ

か... 上ノ界 言ナリ

か... 言ナリ

か... 言ナリ

是... せ

〜通... せ

は... せ

あ... せ

價諸

太夫 六拾九文

天神 三拾二文

・ 胡... 拾又文

・ 毛... 貳拾貳文

・ 毛... 拾又文

一切 田

● 子 貳拾七匁
△ 一 四 二 匁

● 奉以持 揚屋拾六匁
茶屋拾二匁

● 席子位送廿五匁 貳拾七匁貳分

● 葛仕巴 拾貳匁

● 一袋揚 拾七匁六分

● 肩仕巴 拾三匁六分

● 一俣り 六匁二分

● 一切 貳匁六分

● 呈揚 貳拾貳匁

● 同藝子夜揚 拾三匁六分

● 一切 貳匁六分

● 月店廿五 貳拾貳匁
● 七 匁
● 一切 三 匁

● 太夫 銀三匁

● 引船 同貳匁

● 天井 同同匁

● 藝子 同同匁

● 同茶屋 天井 同同匁
● 藝子 同同匁

● 同味登 送母序 同同匁
● 在母序 同同匁

○級日定月

正月

三ヶ日 四日 五日 六日
七日 九日 十日 十四日
十五日 十六日 廿日 廿五日 廿八日

二月

朔日 初午 二年 十五日
廿二日 廿三日 廿八日
外にひかん七日がる

三月

朔日 三日 四日 五日
六日 七日 十六日 廿日 廿五日 廿八日

四月

朔日 八日 十五日 十七日 廿日
廿一日 廿五日 廿八日

五月

朔日 五日 六日 七日 八日
九日 十番 廿五日 廿八日 晦日

六月

朔日 七日 十日 十一日 十四日
十五日 十六日 十七日 廿日 廿一日
廿二日 廿四日 廿五日 廿七日 廿八日
廿九日 晦日

七月

朔日 七日 十日
十四日より晦日まで

八月

朔日 十四日 十五日 十六日
廿五日 廿八日 外にひかん
七日がる

九月

朔日 九日 十日 十一日 十二日
十三日 十四日 十五日 十六日 廿日
廿一日 廿二日 廿三日 廿五日 廿六日
廿七日 廿八日 廿九日 晦日

十月

朔日 六日 十日 十一日 十三日
十四日 十五日 廿五日 廿八日 亥時

十一月

朔日 八日 十二日 十五日 十六日
十七日 廿五日 廿八日
外に家々のすゝもひ

十二月

朔日 十三日 廿五日 廿九日
廿八日

但

外に家々の解つきと守り
庚申年申改日也

○茶屋負数

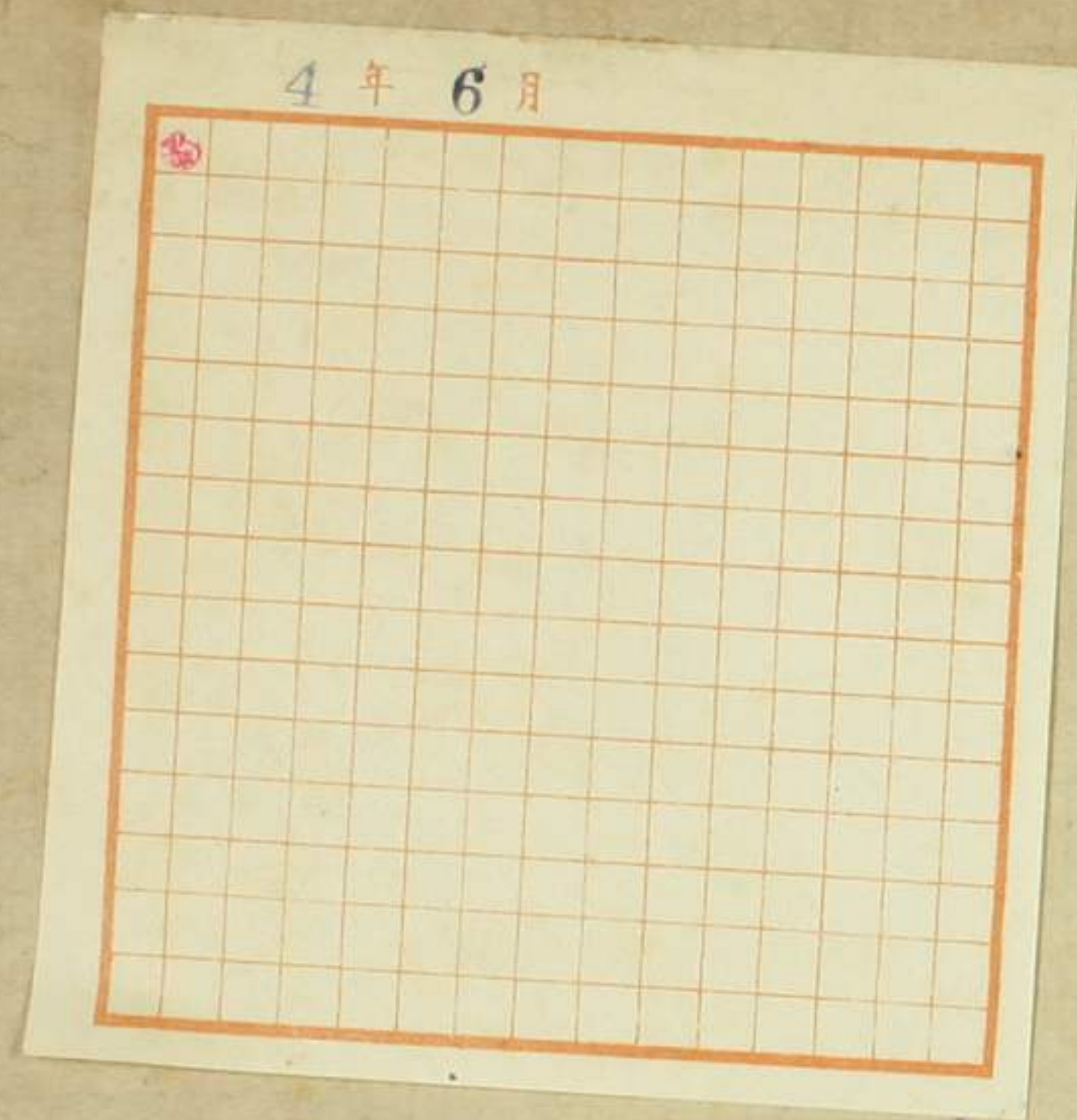
茶屋唐土の通号の事 茶屋原
細見一目子形とつる書小りく
のせとれい器と新所中茶屋と
いつの惣合口十二形と足所散免
の株と他面よりうひの津の茶屋と
いつのいさ大さきとる構とてあ茶屋あり
事他必の揚屋も及びがこく九所の
作法とて揚屋と遠ひ小天神以下の
女所ハ茶屋へもあつた

夕くほや研く

龍おと窓の完

とせ紙

4年6月



○茶屋負数

茶屋唐土の通号の事 茶屋原
細見一目子形とつる書小りく
のせとれい器と新町中茶屋と
いつの惣合字十式形と足沛散免
の株と他前よりうひの浦津の茶屋と
いつのいさ大さきとる構うと茶屋
本茶屋の揚屋も及びがさく九所の
作法と揚屋と遠く小天神以下の
女師ハ茶屋へも出る也

とせ紙

夕くほや研く

龍おと窓の完



